Newsletter

No. 21 March 31 2016

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

Historia de un Oso　ある熊の物語

先日、世界的にも有名な映画賞オスカー短編アニメーション部門にてチリ史上初の受賞という快挙を遂げました。チリではこの受賞に対し大きな盛り上がりを見せていますが、一方華々しい受賞の陰には様々な物議をよんでいます。

この物語は、家族とともに幸せに暮らす熊がある日何者かによって捕らえられ、家族から引き離された上にサーカスの熊として生きることを強要され、最終的には家族に会いたい一心で命からがらサーカス団から逃げ出す様子が描かれています。チリ人、ガブリエル・オソリオ監督による脚本で、1973年チリがピノチェト軍事政権下におかれた際、社会主義政権を支持する反ピノチェト派であった彼の祖父が逮捕され2年間の収監の後イギリスに亡命したという経験がこの映画に投影されています。チリではサッカーの話題、宗教の話題、政治の話題は慎重にと言われるほど若い世代も含め政治の話になると議論が熱くなることが往々にしてあります。それ故今回の受賞はそれぞれの視点でその当時の混乱と悪夢を思い起こさせ大きな影響を与えたといえるでしょう。監督のインタビューで『この作品を見てくれた人が、愛する人の事や、自分の人生においてその人たちがどんな大切な存在か気づいてくれることを期待します。』と述べているように政治の派閥を問わずチリ人の家族を大切にする国民性が垣間見える作品でもあります。 現在、豊かで平和なチリですが、わずか43年前に起きたチリの悲しい歴史は、未だチリの人々の心の奥底に刻まれているように思われます。

ニュースレター第21号ではジョイント・ディグリープログラムとPRENECに関する最新情報を中心にお届けいたします。

小田柿　智之　　LACRC 消化器病態学分野

LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile

第88回オスカー受賞の様子

映画の一コマより

Contents

ご挨拶 1
JDプログラム 2
PRENECの進捗状況 3
活動報告 5

ジョイント・ディグリープログラム

国立大学法人東京医科歯科大学（TMDU）は、海外の大学と連携し共同で大学院教育を行い、連名で一つの学位を授与するジョイント・ディグリー・プログラム（以下JDP）を開設します。このプログラムは、文部科学省により平成27年6月15日に日本で初めて設置が認められました。平成28年4月からチリ大学（UCh）と本学大学院博士課程においてこのプログラムに関する専攻を立ち上げ、学生の受入れを開始いたします。本号ではチリにおけるJDPの進捗状況を報告いたします。

平成28年度学生決定

本年1月、TMDU・UCh合同の学術委員会による審査のもとJDP一期生となる平成28年度の入学試験が行われ、チリ人医師の入学が決定しました。以下に、記念すべき一期生としてディエゴ・サモラーノ・ヴァレンスエラ医師の志願書の一部を抜粋して掲載します。

“ディエゴ・サモラーノ・ヴァレンスエラと申します。

一般外科専門医を取得後、現在、クリニカ・ラス・コンデス（CLC）の大腸肛門科にて特別研究員として研究活動を行っております。この場をお借りしてこのプログラムへの志望理由を述べさせていただきます。

第一にこのプログラムは、私が関心を持っている大腸肛門科分野の研究に取り組むだけでなく、大腸肛門科専門医取得のための研修も継続できる点にあります。

すなわち、優れた学術機関であるチリ大学においてサブスペシャリティ領域（私の場合、大腸肛門科領域）の臨床研修を受けながら、研究活動に焦点を当てた博士課程プログラムを受講できるという利点があります。このプログラムから多くを学び、将来的には、革新的な治療の開発に携わることができればと考えております。

また、チリ大学・東京医科歯科大学ともに伝統のある優れた学術機関であることも志望理由の一つです。

チリ大学は確立されたサブスペシャリティ領域のプログラムがあり、質の高い専門家教育の歴史があります。さらに、臨床教育の場であるCLCは、チリ国内の治療や研究においてパイオニア的な存在です。

東京医科歯科大学も特に大腸肛門科の分野における治療知識や専門技術においては国のトップに位置し、世界において中心的な教育機関として認められています。

ディエゴ・サモラーノ・ヴァレンスエラ医師

2009年デサロジョ大学医学部卒業後、2010年～2014年に修士課程「デサロジョ大学ーアレマナ病院ーパドレウルタード病院ー般外科プログラム」にて一般外科プログラムを修了し、2015年CLC大腸肛門科の特別研究員として現在に至る。

《中略》

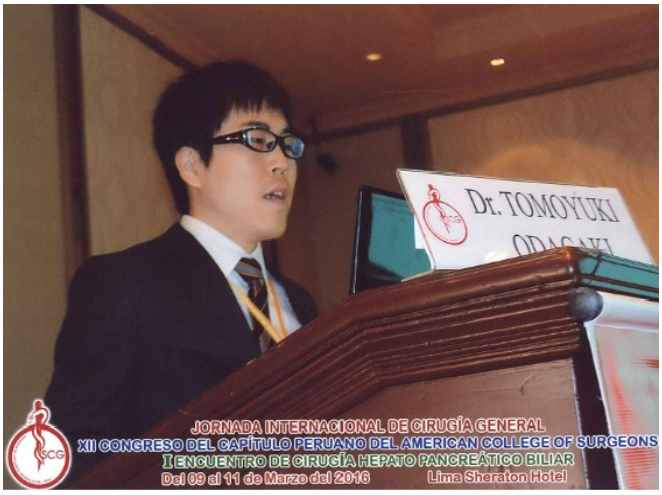
最後になりますがこのプロジェクトを通して、臨床及び研究の両面から多くを学ぶことは医師として成長するこの上ない機会だと確信しております。”

PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト（PRENEC）の最新情報をご報告いたします。現在、プンタ・アレーナス、バルパライソ、サンティアゴの3都市において免疫学的便潜血反応検査（iFOBT）を用いた検診プログラムが進行しております。昨年11月に正式なPRENEC参加の協定を結んだチリ国立がん研究所（サンティアゴ）とグラント・ベナベント病院(コンセプシオン)に加え、参加の見込まれているバルディビア、コピアポ、アントファガスタの各病院を対象にPRENEC導入に向けた具体的な手続きを含む講習会が近日中に予定されております。

また国内にとどまらずペルーやコロンビアへのPRENECの普及活動も行われており、本号ではその様子をお伝えいたします。

ペルー国際外科学会発表及び病院視察



国際外科学会で発表を行う小田柿助教

本年3月9日～11日に第12回国際外科学会（American College of Surgeons ペルー支部）がペルーの首都リマにて開催されました。

この学会にアメリカ、ブラジル、アルゼンチン、ベネズエラの医師と並び、CLCからロペス医師、ポンセ看護師、レイエス医師、ウリベ医師、LACRCから小田柿助教が招聘されました。

ロペス医師は「大腸癌早期診断プログラム」、ポンセ看護師は「PRENECのチーム構築」の発表を行い、小田柿助教は「早期大腸癌の内視鏡治療」及び「ESD治療」に関する発表を行いました。学会期間中にPRENECに興味を持つペルー国内の国立エドガルド・レバグリアティ・マルティンス病院、及びセンテナリオ・ペルアノ・ハポネサ病院の視察を行いました。

国立エドガルド・レバグリアティ・マルティンス病院は1500床の規模を持つ国内有数の公立病院で、同院への視察の際に、小田柿助教より「早期大腸癌の内視鏡治療」に関する講演が行われました。

エドガルド・レバグリアティ・マルティンス病院

センテナリオ・ペルアノ・ハポネサ病院

第三国研修後のモニタリング出張

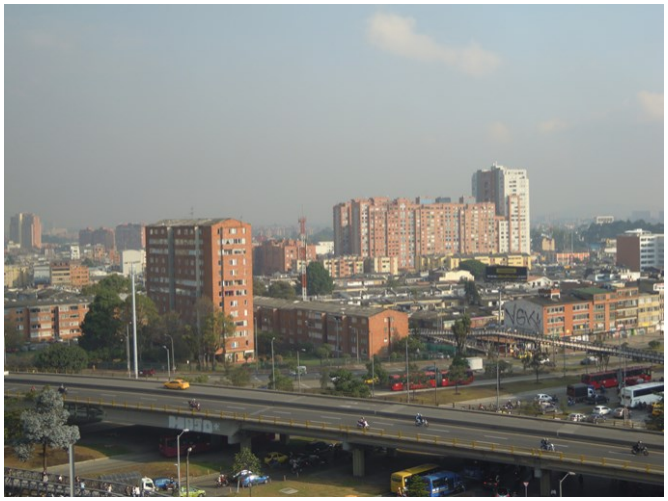
JICA・AGCID（国際協力庁）共催のもと昨年８月に開催された第三国研修から半年以上が経過したことで、研修後の成果等をモニタリングする目的で、LACRCからは小田柿助教、CLCからロペス医師、ポンセ看護が本年３月１０日～１２日に研修参加国のコロンビアへ出張しました。

コロンビアの首都、ボゴタにあるロサリオ大学医学部附属マジョ―ル・メデリ大学病院にて、第三国研修に参加した医療チームのメンバーと同院経営幹部及び政府関係者が集まり現在のコロンビアでの進捗状況を確認するとともに、今後に向けての話し合いが行われました。

コロンビアでは現在検診プログラム導入に向けて準備を進めており、次のステップとして今年８月開催予定の第三国研修に昨年参加した医療チームの代表として更なる進捗状況を報告することが決まっています。

コロンビア病院関係者と記念撮影

ロサリオ大学医学部附属マジョ―ル・メデリ大学病院



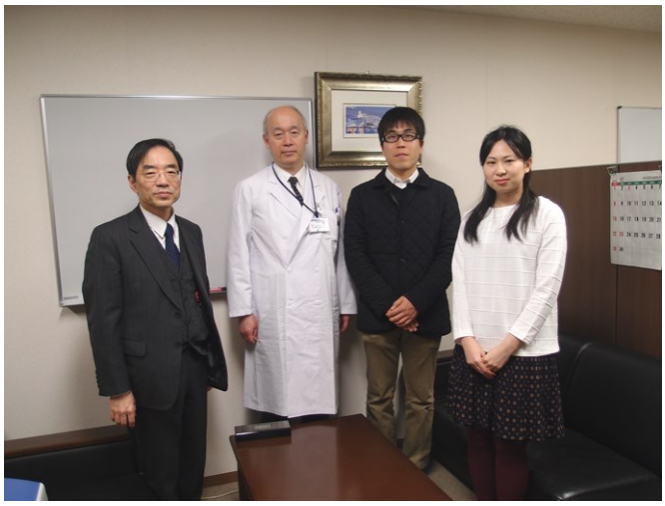
首都ボゴタの街並み

ポンセ看護師(写真中央)と昨年の第三国研修参加者

LACRC活動報告

小田柿助教、一時帰国

本年1月にLACRC小田柿助教が一時帰国した際に、本学医療・国際協力担当である田中理事とLACRC拠点運営管理者の河野副理事へ現在のLACRCの様子、PRENECの進捗状況と日本人医師の役割等を報告いたしました。また、河野副理事を中心に新たにチリ拠点の運営に参画することになった安野准教授及び過去にLACRCへ赴任された方々による小田柿助教の慰労会が開かれ大いに盛り上がりました。



左より田中理事、河野副理事、小田柿助教、山中係員

チリ拠点運営管理者ならびにLACRC関係者による慰労会の様子

エル・カルメン（マイプ）病院見学

エル・カルメン（マイプ）病院は首都州、サンティアゴの南西に位置したマイプ区にある公立病院です。マイプ区だけでなく近隣の区からも多くの患者を受け入れております。

エル・カルメン病院に勤務するCLC大腸肛門科チームのサラテ医師の要請により、小田柿助教が「PRENECにおけるチリ人医師への大腸内視鏡指導の状況」及び「大腸ESD治療」に関する講演を行いました。

参加者は同院の消化器・大腸肛門科の医師やレジデントが中心で、活発な討論がなされました。このような機会を大切にし、PRENEC活動以外でもチリの医療に貢献できればと思っております。

エル・カルメン（マイプ病院）消化器・大腸肛門科スタッフと記念撮影

LACRC新オフィス

前号編集後記でもお伝えしましたように2016年1月、CLCの外来診療部の整備目的にてLACRCオフィスはEDIFICIO AZUL 2階から地下1階へと移転となり、2010年にLACRCがCLC大腸肛門科チームとオフィスを並べ開設されて以来2度目の移動となりました。以前はCLCアカデミック部門の横に位置していましたが今回はCLC内視鏡センターの横へと構えオフィス面積も広がりました。

小田柿助教の部屋

ハイメ氏、早川氏の作業スペース

LACRCオフィス入口

大腸肛門科スタッフのデスク

編集後記

3月、バケーション後のチリは新年度、新学期の始まりです。

海外やビーチで長い休暇を過ごしていた人々がサンティアゴの街に戻り、交通機関にも影響が出るほどの混乱です。

今後もNewsletterを通じて近況を報告して参ります。より良い誌面を作成する為皆様からのご意見・ご要望がございましたら気軽にLACRCオフィスまでご連絡くださいませ。

（早川美貴）

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 21, March 2016

［発行日］2016年3月31日
［制作］Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp

Newsletter

No. 22 June 30 2016

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

チリ富士

日本は本格的な夏に入る頃かと思いますが、地球の裏側チリは、朝晩冷え込む季節となってきました。我々の拠点のある首都サンティアゴは冬になると光化学スモッグが発生するのですが、スモッグが晴れた天気のいい日には、雪を被ったアンデス山脈の美しい山肌が見えるようになってきました。

日本の多くの方々にとって、チリは非常に遠く、馴染のないところかもしれませんが、地震国であること、国が南北に長いこと、海・砂漠・アンデス山脈に囲まれており隣国から隔離されているところ、（他の中南米諸国に比べて）勤勉な傾向があること、など日本と似ている点が多々あります。

ところで下の写真は日本人なら誰もが富士山かと勘違いするのではないでしょうか？実は、チリの南部にあるオソルノ山です。オソルノ山は典型的な円錐型をした成層火山で、姿や形が日本の富士山と似ているため日本人の間では 「チリ富士」と呼ばれることがあります。

意外にも日本と似た点を多く持つチリに対して、日本の方々に少しでも興味を持っていただければと思う次第です。

本号では、ジョイント・ディグリープログラム（JDP）、大腸癌早期診断プロジェクト（PRENEC）の進捗情報を中心に、LACRCの活動をお伝えしていきます。

小田柿智之　LACRC　消化器病態学分野

オソルノ山 （参照：#04300 FREE DESKTOP WALLPAPER - Volcán Osorno, Chile）

LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile

CLC CLINICA LAS CONDES

Contents

ご挨拶 1
JDプログラム 2
PRENECの進捗状況 4
活動報告 7

ジョイント・ディグリープログラム

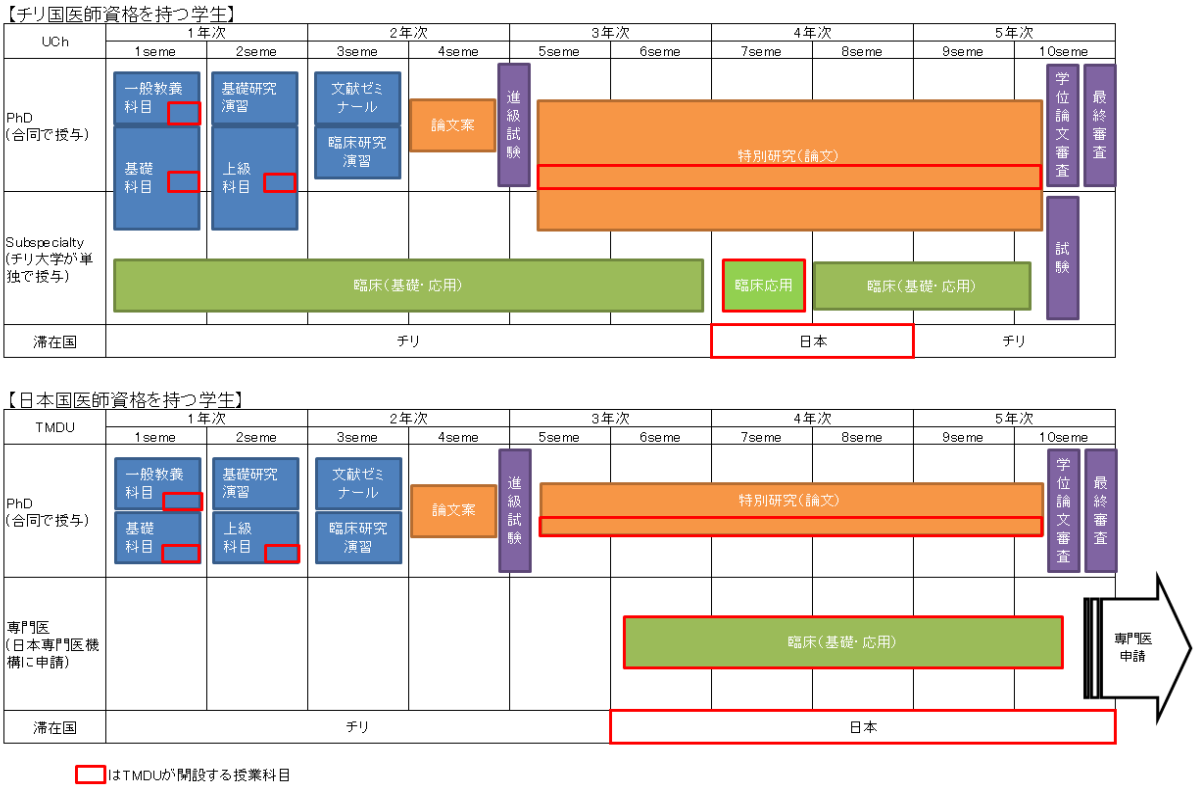
今年4月から本学の大学院医歯学総合研究科博士課程にチリ大学とのジョイント・ディグリー・プログラムである国際連携医学系専攻が開講いたしました。本専攻第一期生となる学生が入学したことで、本学及びチリ大学教職員がより一層連携を密にし、プログラムの発展に向け取り組んでおります。本号では改めて本専攻の概要や毎月行っている本学・チリ大学合同の学術委員会（テレビ会議）について紹介いたします。

また次号のニュースレターにて、学生指導や今後の両大学の発展に向けた活動状況等を報告してまいります。

国際連携医学系専攻のカリキュラム概要

本専攻は上部消化管外科学、大腸肛門外科学、胃腸病内科学の3領域でコースを開設しております。また入学資格により修了までのスケジュールが異なりますが、それは指導教員が個々の学生の経験や能力、そして研究内容に合わせた履修科目や研究手法を提案するためであり、他専攻よりもフレキシブルなカリキュラム編成となっています。

本学、チリ大学及びクリニカ・ラス・コンデスとの連携のもと、グローバルな視点から医療・研究を捉えることができるリーダーを育成することを目的としております。



本学・チリ大学とのJDPカリキュラム構成

【参考】

●チリ国医師資格を持つ学生:学位及びチリ国における専門医資格が5年で取得できる構成となっており、4年次に日本で修学することとなっています。

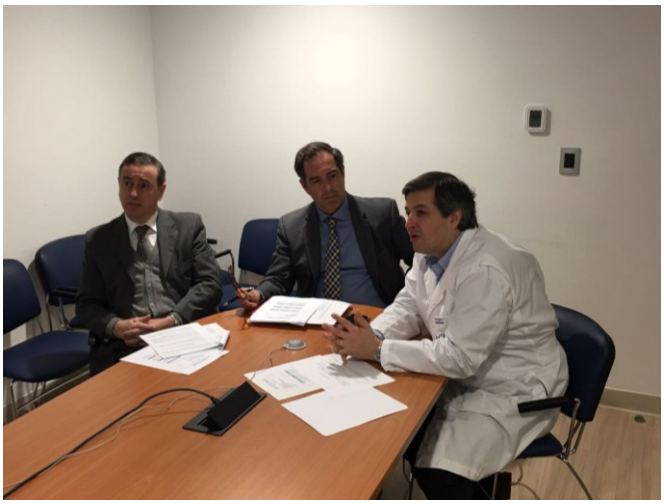
●日本国医師資格を持つ学生:学位取得をした後に、専攻コースに応じた専門医資格を取得するために、日本における専門医資格を認定する機関に申請することが可能となります。また入学初年度から2年次まではチリで講義を受講し、3年次に日本に帰国した後、本格的に論文作成や臨床科目の授業が始まります。

チリ大学・東京医科歯科大学学術委員会（テレビ会議）

本学及びチリ大学の教員で構成している「学術委員会」は毎月１回テレビ会議システムを使用して開催しています。本会議は、東京医科歯科大学・チリ大学国際連携医学系専攻における教育・研究活動や管理・運営方法について両大学が協議する場となっています。また、毎月開催することにより、学生の修学状況や運営に関する細かな事項まで確認することができ、本専攻の運営において大変重要な役割を担っています。

本年６月１４日に開催された会議においては来年度の試験日程や学生の修学状況について確認するなど、様々な準備を進めております。学生が充実した学生生活を送れるよう、本学術委員会が責任を持って引き続き管理・運営を行います。

会議の様子（日本側）



会議の様子（チリ側）

※2016年6月14日（火）日本時間20時30分～　チリ時間7時30分～

PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト（PRENEC）の最新情報をご報告いたします。現在、プンタ・アレナス、バルパライソ、サンティアゴの3都市において免疫学的便潜血反応検査（iFOBT）を用いた検診プログラムが進行しております。本年5月、第3州バジェナール市が正式にPRENEC参加の協定を結びました。この都市に加え既に調印を交わしているサン・ホセ病院（オソルノ市）とバルディビア病院（バルディビア市）の参加の見込まれている3都市の各病院を対象にPRENEC導入に向けた具体的な手続きを含む講習会が開催されました。

本号ではその様子をお伝えしていきます。

PRENECの進捗報告

バジェナール市PRENECへの正式参加

ウワスコ病院のスタッフとロペス医師ら

ウワスコ病院外観

バジェナール市はチリ北部アタカマ州（第３州）に位置した人口約52，000人の農業と鉱山が主な特徴の地域です。

本年５月にロペス医師等がウワスコ病院を訪れ、正式にPRENEC参加の協定を締結しました。

ウワスコ病院はプロジェクトに強い関心を持っていることからプロセスが通常より早く進み協定の締結とほぼ同時にPRENEC講習会への参加が決定しました。

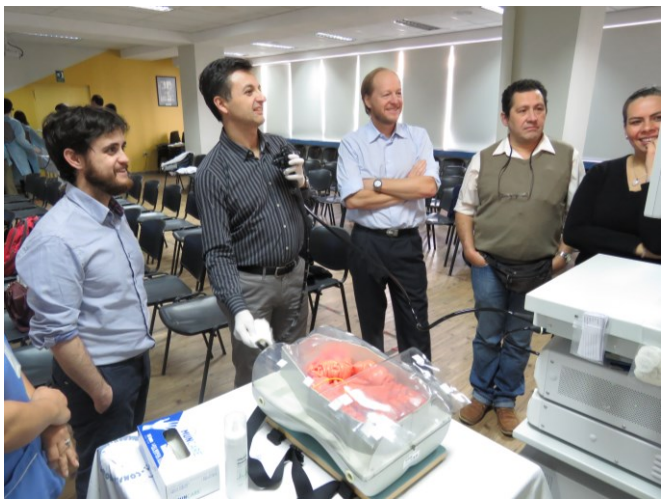
PRENEC講習会開催

本年５月９・１０日の２日間にわたって、サン・ホセ病院（オソルノ市）とバルディビア病院（バルディビア市）、ウワスコ病院（バジェナール市）の医療スタッフ（内視鏡医、病理医、看護師等）を対象にPRENEC開始の為の講習会が開かれました。

本講習会では新規参加に必要な設備や運営方法、便潜血検査、データの取り扱いなどに関する説明の他、実際に今までに起きた問題点に関する意見交換などが行われました。小田柿助教からは、「PRENEC研修医師への指導方法」及び「質の高い内視鏡治療をするために用意すべき処置具」についての講演、「コロンモデルを使用した内視鏡指導」のデモンストレーションが行われました。

本講習会がPRENECの新規拠点の開始に向けての一助となる事を期待しております。

講習会参加者と記念撮影



サン・ボルハ病院にてコロンモデルを使用した講習

PRENEC論文がチリ消化器病学会誌へ掲載

Gastroenterología Latinoamericana誌表紙より

LACRC開設当初から伊藤崇助教と後任の河内洋講師によって進められていたPRENEC病理分野に関するスペイン語論文「Standardized protocol of Anatomic Pathology of early lesions in Colorectal Cancer Prevention Project (PRENEC)」がチリ消化器病学会誌であるGastroenterología Latinoamericana誌へ本年３月に掲載されました（Ito T, Kawachi H, Peñaloza P, et al. Gastroenterol Latinoam 2016;27:37-46）。この論文はPRENECにおける病理医の役割から病理標本の取り扱い・診断分類などのプロトコルを詳細に解説したガイドライン的内容になっています。従来大腸病変の病理診断においては欧米式が主流であったチリにおいて、伊藤助教、河内講師は日本式の普及に努めて来ましたが、この度PRENECプロトコルがスペイン語による論文として出版されたことの意義は大変大きく、チリ国内における質の高い大腸癌検診の普及が加速することが期待されるとともに、スペイン語を母国語とする他の中南米諸国へのアピールとしても重要な意義を持つものです。

雑誌Gastroenterología Latinoamericana
掲載内容URL（http://gastrolat.org/gastro-1-2016/#/14/）

プンタ・アレナス出張

PRENEC基幹病院であるマガジャネス病院の要請にて現地での対応が困難な症例の大腸内視鏡治療、及び、現地医師への技術指導目的で、小田柿助教が同院へ出張しました。滞在最終日にはロペス医師等とともに講演会に参加し、「PRENECにおける大腸腫瘍に対する内視鏡治療」の講演をしました。また、現地の新聞に本講習会の様子が掲載されました（写真右）。

マガジャネス病院のスタッフらと小田柿助教

Permite detectar precozmente el cáncer de colon

Programa preventivo de colon y recto ha beneficiado a más de 7 mil usuarios de Fonasa

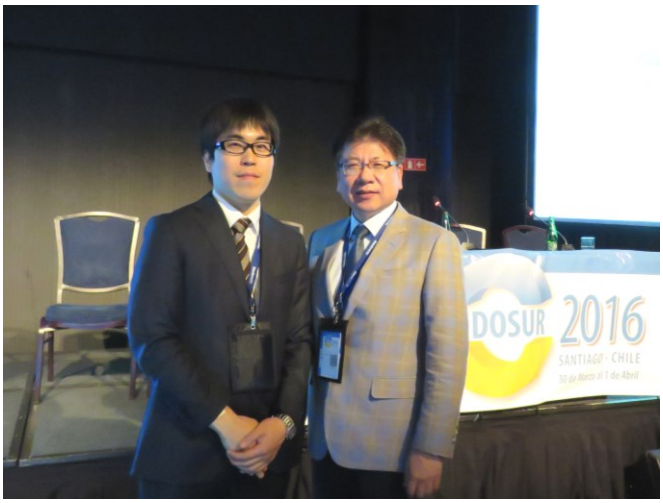
“7000人以上の公的保険Fonasa被保険者が大腸直腸癌検診プログラムを利用”
新聞ラ・プレンサ・アウストラル2016年6月12日付

LACRC活動報告

国際シンポジウムENDOSURへの参加

２年に１度開催されている国際シンポジウム「ENDOSUR」が本年３月３０日から４月１日までの３日間にわたってサンティアゴにて開催されました。今回も南米医師にとどまらず米国、イタリア、韓国の医師等が演者として参加し、消化管疾患に関する講演や最新の研究発表を行いました。LACRCからは小田柿助教が参加し、「早期大腸癌の内視鏡的治療」に関する講演、及び、「ESDハンズオン」にて実技指導を行いました。また、本シンポジウムではPRENECに関するワークショップも開催されました。小田柿助教は「PRENEC研修医師に対する大腸内視鏡トレーニング方法」に関しての発表を行い、他国の参加者からも高い関心が寄せられました。

パネルディスカッションの様子



韓国からの演者Seon-Hahn Kim医師とともに記念撮影

ENDOSUR理事のナバレッテ医師とハンズオンの様子

パラグアイからの参加者オビエド医師（写真右）との記念撮影

内視鏡講習会

本年6月23-25日の3日間、南米の医師を対象にした内視鏡ワークショップがCLCにて開催されました。

チリ人医師に加えてLACRCからは小田柿助教が演者として招かれ、「上部消化管の観察法」に関する発表を行いました。

本ワークショップは、チリ人医師のみならず、他国（コロンビア、アルゼンチン）の医師も参加しており、知識・技術の習得のため、熱心に取り組んでいました。

発表を行う小田柿助教とCLCのルーベル医師

実技指導の様子

講習会参加者の集合写真

編集後記

チリ政府は昨年1月よりサマータイム制（夏時間・冬時間の変更）を廃止としましたが、廃止の結果、冬季の短い日照時間による安全面が懸念された為、本年5月より期間限定で元のサマータイム制に戻しました。日本との時差は冬時間は12時間から13時間へ変更され、これにより本号でお伝えしたテレビ会議ではチリの早朝、日本の遅い時間からの開始となり双方に多少なりとも影響が出ています。

今後も本Newsletterを通してLACRCの活動を報告してまいります。（早川美貴）

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 22, June 2016

［発行日］2016年6月30日
［制作］Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp

Newsletter

No. 23 September 30 2016

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

アフ・トンガリキ

先日、リフレッシュ休暇を利用し、イースター島の観光に行ってきました。イースター島は、チリ本土から西に約3800kmの太平洋上に位置する小さな孤島で、1888年よりチリ領となり、現在に至ります。この島を世界的に有名にしたのは、言わずと知れた巨石像モアイの存在です。イースター島には約900体のモアイが存在しますが、当時の部族間抗争により全てのモアイが倒されてしまい、現在、復元・修復され立っているものは40体程度に過ぎません。

左下の写真は、テレビや雑誌などで目にしたことがある方も多いかと思いますが、15体のモアイが立ち並ぶ「アフ・トンガリキ」です。これらのモアイの修復・立像に日本企業が貢献しました。

アフ・トンガリキのモアイは、1960年のチリ大地震による津波の影響で、海岸から離れた内陸地まで流されておりました。こういった状況が、「日立世界・ふしぎ発見!」のイースター島特集で放送されたことをきっかけに、株式会社タダノが費用を全額負担し、1991～93年にかけて発掘調査・修復作業が行われました。

海を背に整然と立ち並ぶ15体のモアイは、現在ではイースター島の観光名所の一つとなっており、モアイの近くには、現在もタダノの功績を評するプレートが設置されています。

分野は異なりますが、上述した日本企業のモアイ修復プロジェクトのように、本学が協力する大腸癌早期診断プロジェクト（PRENEC）もチリで大きな成果を挙げられるよう、日々勤しんでいきたいと思います。

小田柿智之　LACRC 消化器病態学分野

15体のモアイが並ぶアフ・トンガリキ

株式会社タダノの功績を評価するプレート

LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile

CLC CLINICA LAS CONDES

Contents

ご挨拶 1
JDプログラム 2
PRENECの進捗状況 3
活動報告 5

ジョイント・ディグリープログラム

前号に引き続き、ジョイント・ディグリー・プログラムの活動状況を報告いたします。平成29年度入学試験の第1次募集が開始となりますので、興味がある方は下記を一読の上、早めにお問い合わせください。
次号も引き続き本Newsletterにて、今後の活動状況等を報告してまいります。

平成29年度東京医科歯科大学・チリ大学
国際連携医学系専攻における学生募集

本年１０月３日から本専攻における第１次学生募集が開始します。本専攻に入学する学生は、「専門性の高い経験・技能を有する高度専門的職業人であり、またグローバルな視点から医療・研究を捉えることができるリーダーとなる」ことが期待されます。本学から入学した学生は基礎科目履修期間をチリ国で過ごし、論文計画案の作成を行います。履修科目のほとんどを海外で学び、また学生個人の興味に即した履修カリキュラムを組み立て、研究内容に最も適した指導教員を充てるなど、他専攻にはないフレキシブルで魅力的なカリキュラムとなっています。また入学検定料、入学金、授業料を不徴収とすることより、経済的負担については比較的不安なく学修に取り組むことができます。今後国際的な医療人、研究者を目指す高い志を持つ方の出願をお待ちしています。

なお、本専攻は出願者が取得している医師資格によって出願手続きを行う大学が異なっております。日本国医師資格を持つ方は、本学にて出願手続きをしていただきますようお願いします。さらに各大学における募集手続きに関して詳細を希望される方は、下記参考のHPをご覧ください。

【参考】
●チリ国医師資格を持つ学生（チリ大学HP参照）
チリ大学医学部大学院博士課程医科学専攻

http://www.postgradomedicina.uchile.cl/med.portal?_nfpb=true&url=10465&_pageLabel=conUrlRojo&1=1

●日本国医師資格を持つ学生（東京医科歯科大学HP参照）
東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科
東京医科歯科大学・チリ大学国際連携医学系専攻

http://www.tmd.ac.jp/faculties/graduate_school/jd_hp/10_576b95e325de5/index.html

PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト（PRENEC）の最新情報をご報告いたします。現在、プンタ・アレナス、バルパライソ、サンティアゴの３都市において免疫学的便潜血反応検査（iFOBT）を用いた検診プログラムが進行しております。
本号では昨年に続き2回目となる第三国研修の様子をお伝えします。

第三国研修

ボリビア及びパラグアイの医療チームを対象にJICA・AGCID（チリ国際協力庁）後援の第2回第三国研修が開催されました。本学から岡田卓也講師と伊藤崇助教がJICA専門家として招聘され、LACRCの小田柿助教、ロペス医師をはじめとしたチリ側のPRENECスタッフと共に指導にあたりました。
研修は８月２９日から５日間に渡り行われました。今回は講義のみでなく、PRENECのプロモーションから内視鏡検査、病理診断に至るまでの実際の過程を紹介することで、昨年に比べてより実践的なプログラムとなりました。
本開講式では、チリ保健省ソト副大臣補佐官、日本大使館折原参事官、倉田書記官、在チリボリビア領事館オクサ領事、アルバレス下院議員、JICAチリ支所桜井支所長、AGCIDリラ理事長とその他多くの方々にご臨席を賜りました。
今後もこのような機会を通して南米でのがん検診の普及に貢献していきます。

AGCIDホームページ掲載写真
「チリにてボリビア及びパラグアイの医療チームが大腸がん検診に関する研修を受ける」
※本学ホームページにおいても当該情報を発信しております。
http://www.tmd.ac.jp/english/news/20161004/index.html

伊藤助教による発表の様子

岡田講師による実技指導の様子

小田柿助教による実技指導の様子

CLCにて研修参加者と記念撮影

ペレイラ病院にて病院スタッフ及び研修参加者との記念撮影

受講後テストを受ける研修参加者ら

LACRC活動報告

第3回Panamericano de Cáncer Gástrico学会参加

本年７月７日～９日に第３回 Panamericano de Cáncer Gástricoがサンティアゴにて開催されました。チリ及び中南米諸国の他、イタリア、日本からも演者が招聘されました。LACRCからは小田柿助教が招聘され上部消化管のESDに関する講演を行いました。

学会理事のベナビデス医師とともに記念撮影

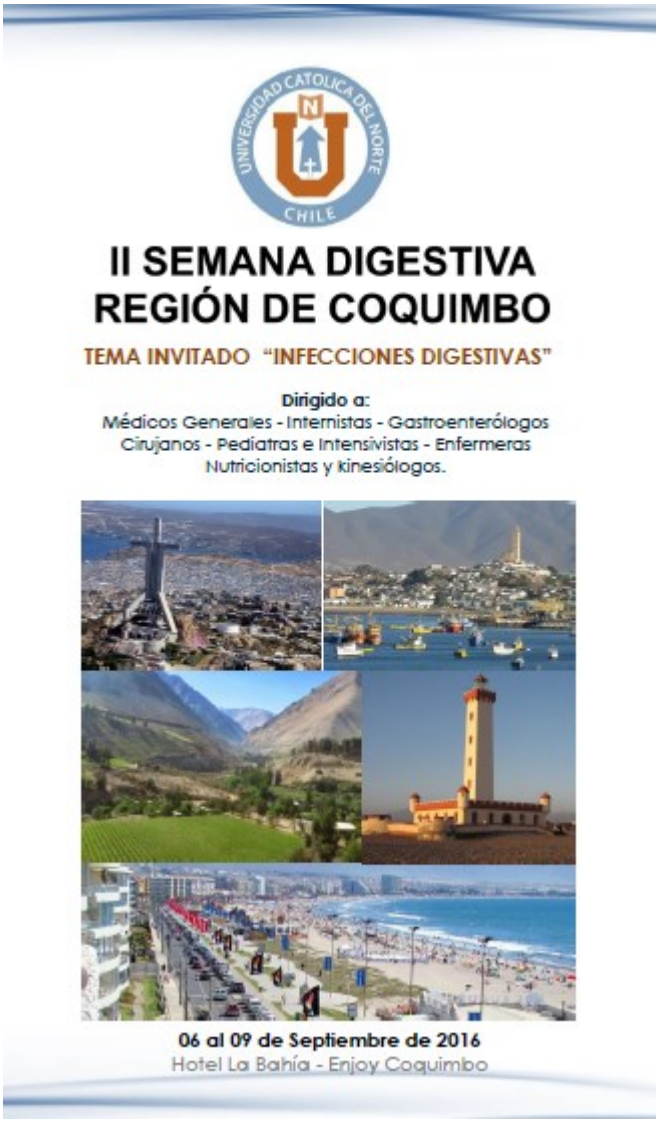
左よりナバレッテ医師、小田柿助教、エステラ医師、シッド医師

ラ・セレナにおいて学会開催

毎年開催されているラ・セレナ市北カトリカ大学主催の消化器病に関する学会にLACRCから小田柿助教が講師として参加しました。

小田柿助教は「上部消化管における早期がんスクリーニング方法」に関する発表を行い、日本式の内視鏡スクリーニング方法に高い関心が寄せられました。

学会理事ブレスキー医師（右より3番目）と学会発表者との昼食の様子



編集後記

本号でお伝え致しました通り、第三国研修では前赴任医師であった岡田講師、伊藤助教お迎えしました。LACRCスタッフは勿論の事、クリニカ・ラス・コンデススタッフ、サン・ボルハ病院スタッフ、ペレイラ病院スタッフ、マガジャネス病院医師と各方面で懐かしく、笑いに包まれた嬉しい再会のひとときとなりました。

今後も本Newsletterを通してLACRCの活動を報告してまいります。（早川美貴）

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 23, September 2016

［発行日］2016年9月30日
［制作］Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp

Newsletter

No. 24 December 31 2016

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

Licencia de conducir ～ チリの「運転免許」事情 ～

年の瀬もいよいよ押し迫り、今年もまさに暮れようとしている12月30日にチリの運転免許証を取得してきました。チリに赴任して2年が過ぎた今になって運転免許証を取得したことには理由があります。

実は、私が赴任した当初は、国際免許証の有効性に関して公式な法解釈は出ていなかったものの、「滞在査証等を取得した外国人であっても、携帯している国際運転免許証が有効であれば、チリ国内での運転には問題はない」との認識で、在チリ日本大使館もチリの運転免許証の取得を推奨していませんでした。しかしながら、本年7月頃から、警察が、「国際免許証は旅行者のためのものであるとして、在査証等を取得した者については無免許として取り締まる」という立場をとるようになったことで、チリの運転免許証の取得が望ましいという状況に変わってしまいました。

ただ、試験を受けるにあたり、スペイン語への不安から、どうやって勉強をしたら良いのか分からず、しばらく右往左往してしまいましたが、知り合いの在留邦人の方々から、攻略法などの多くの情報やアドバイスを頂き、なんとか年内に運転免許証を取得することが出来ました。

今回のように、海外では自分一人で解決できないことが多いせいか、より一層、人との繋がりの大切さを実感いたします。

兎にも角にも、私にとっては今年を締めくくる最後の戦いに勝利したことで、気分よく新年を迎えることが出来そうです。

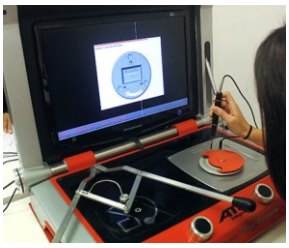
来年も我々の活動だけではなく、チリでの生活や風習、日本との違いなども、皆様にお伝えしていければと思っています。今後とも宜しくお願い申し上げます。

小田柿智之　LACRC　消化器病態学分野

LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile

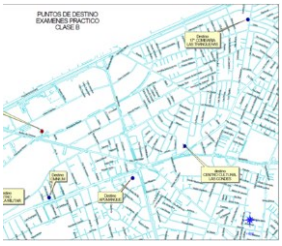
Contents

ご挨拶 1
JDプログラム 2
PRENECの進捗状況 4
活動報告 6



適性試験

学科試験



実技試験地図

ジョイント・ディグリー・プログラム

本年10月及び12月に、ジョイント・ディグリー・プログラム（以下、JDP）のチリ側の担当者を本学に招待し、今後のJDPのカリキュラム内容やプログラムの運営についての会議を行いました。12月の訪問時には、チリ大学と本学との合同教職員FD研修（教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称）も実施し、両国の医学教育や医療制度、最先端医療・研究を互いに理解しあう貴重な機会を得ることができました。本号では訪問時の様子をお伝えいたします。

10月のチリ大学教員による本学訪問

10月24日・ 25日にチリ大学のゴメス准教授及びCLCのラトーレ医師が、吉澤学長への表敬訪問、及びJDPに関する会議のため本学を訪問いたしました。会議では、JDPの充足について、消化器病態学分野長である渡邉教授及び肝臓病態制御学講座の朝比奈教授を含む関係教員等と意見交換を行いました。特に日本及びチリにおける胃腸病内科の状況について情報を共有し、学生の研究テーマと成り得る研究内容についての検討が行われました。将来的に、本プログラムから発展した、チリ大学及び本学教員による共同研究の可能性についても提案がありました。

左より北川教授、ラトーレ医師、吉澤学長、ゴメス准教授、田中理事

12月のチリ大学教員による本学訪問
及びJoint Workshop 2016 @TMDU

12月7日・8日にチリ大学のオライアン教授、ポニアチック教授、トレス准教授、カルデロン助教が本学を訪問し、FD研修「Joint Workshop 2016@TMDU」、JDP会議、及び医学部附属病院の見学を行いました。

FD研修は2日間にわたり、両大学の教員の能力向上と意識を共有するために実施され、JDPの専任教員や過去にチリへ留学した学生などを含め、計約65名が参加し活況を呈しました。今後JDPのますますの発展が期待されます。

研修会の様子

JDP会議の様子

上段左より安野准教授、植竹教授、荒木准教授、北川教授、朝比奈教授、岡田講師
下段左よりトレス准教授、オライアン教授、ポニアチック教授、カルデロン助教

PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト（PRENEC）の最新情報をご報告いたします。現在、プンタ・アレナス、バルパライソ、サンティアゴの3都市において免疫学的便潜血反応検査（iFOBT）を用いた検診プログラムが進行しております。

上記3都市に加えて、バルディビア、オソルノの2都市で、免疫学的便潜血反応検査（iFOBT）の登録が新たに開始されました。また昨年の地震による影響でコキンボ市の進展に遅れがみられましたが、開始に向けた具体的な講習会が開催されました。

バルディビア市及びオソルノ市でPRENEC始動

１１月、CLCのロペス医師が率いるPRENECメンバーがPRENECの新規拠点が開設されたバルディビア市及びオソルノ市を訪れました。

モール内に巨大な大腸の模型を設置し、模型内にて看護師が一般市民に対して大腸がんの説明を行うほか、栄養士による食事指導、大腸がんに関するビデオを上映し、啓発活動を行いました。

これに併せ、PRENECの免疫学的便潜血反応検査（iFOBT）の登録を開始し、各都市での着実な前進がみられました。

今後、バルディビア市ではアベンダニョ医師、オソルノ市ではカセレス医師が中心となってプロジェクトを進めていきます。

左よりロペス医師、バルディビア病院ベラ院長、アベンダニョ医師

メディアの質問を受けるアルバレス下院議員

左よりロペス医師、カセレス医師

ロペス医師の本学訪問

PRENECプロジェクトに関する会議のために、チリ側の責任者であるロペス医師が、10月20日に本学に訪問いたしました。本学からは、田中理事、河野副理事、北川教授、岡田講師、伊藤助教、横浜市立みなと赤十字病院より熊谷病理部長が参加いたしました。ロペス医師から、PRENECの進捗状況等が説明され、プロジェクトを円滑に進めるための改善点や今後の方針に関して協議されました。

本学内における会議の様子

夕食会にて握手を交わす田中理事（中央左）とロペス医師（中央右）

PRENEC講習会

10月17日・18日の2日間にわたり、PRENEC開始予定であるコキンボ市サン・パブロ病院の看護師、助手、事務を対象としたPRENEC講習会がCLC及びサン・ボルハ病院内にて行われました。この講習会を通して、PRENECへの早急な参加 が期待されます。

ハスミン看護師の説明を受ける講習参加者の様子

日智消化器病研究所前での記念撮影

LACRC活動報告

在チリ日本大使館による草の根案件フォローアップ会合

過去のニュースレターでもご紹介したように（15号参照）、在チリ日本大使館による草の根・人間の安全保障無償資金協力として、サン・ボルハ病院へ5本の内視鏡の提供、及び、施設の一部の改修が、平成26年に行われております。上記協力から2年経過した現在の状況を確認するための会合及び施設見学が、本年10月14日にサン・ボルハ病院で行われました。会合にはサン・ボルハ病院日智消化器病研究所よりエステラ所長、LACRCより小田柿助教、在チリ大使館より折原参事官、倉田書記官、草の根担当の藤田氏 が参加しました。
エステラ所長より、提供された内視鏡の現状や、検査件数の増加などの臨床面に与えた影響に関して説明が行われました。

左より小田柿助教、アラベナ医師、折原参事官、倉田書記官

左よりエステラ医師、藤田氏、小田柿助教

エクアドル第一回国際がん予防シンポジウム

テレビ会議システムを通して発表を行う小田柿助教

2012年に本学とエクアドル保健省との間で締結された覚書に基づき、エクアドル側からの要請に応じて適宜、学会や講習会等を通してLACRCは協力を行ってきております。

本年10月21日、エクアドルの大腸がん検診プロジェクトを推し進めるモンタルボ医師による依頼で、第一回エクアドル国際シンポジウムに、ビデオ会議システムを利用して小田柿助教が参加し、「大腸ESD」「胃ESD」に関する講演を行いました。

参加者は病理医、外科医、内視鏡医に加え、がん専門医、 婦人科医と幅広い分野に及び、がん予防対策に関して多岐にわたる講演が行われました。

エクアドルにおけるがん対策フォーラム

11月30日・12月1日に、エクアドルセントラル大学が、首都キトで主催した同国のがん対策に関するフォーラムに、LACRCの小田柿助教が演者として招聘され、「本学のチリ及び他の南米諸国での活動」、「上部消化管の観察方法」に関する発表を行いました。フォーラムの翌日、モンタルボ医師の所属するパブロ・アルトゥーロ・スアレス病院を訪れ、モンタルボ医師よりエクアドルにおける大腸がん検診の進捗報告を受けました。

キト市内での夕食の様子

左より小田柿助教、バジェッホ医師、モンタルボ医師

内視鏡講習会

12月15日・16日、内視鏡講習会がCLC内にて開かれ、LACRCの小田柿助教が発表者として招かれました。大腸内視鏡検査に関する発表を行い、チリ国内外の医師からの高い関心が寄せられました。

参加者であるベネズエラ人医師（左）と記念撮影

発表の様子

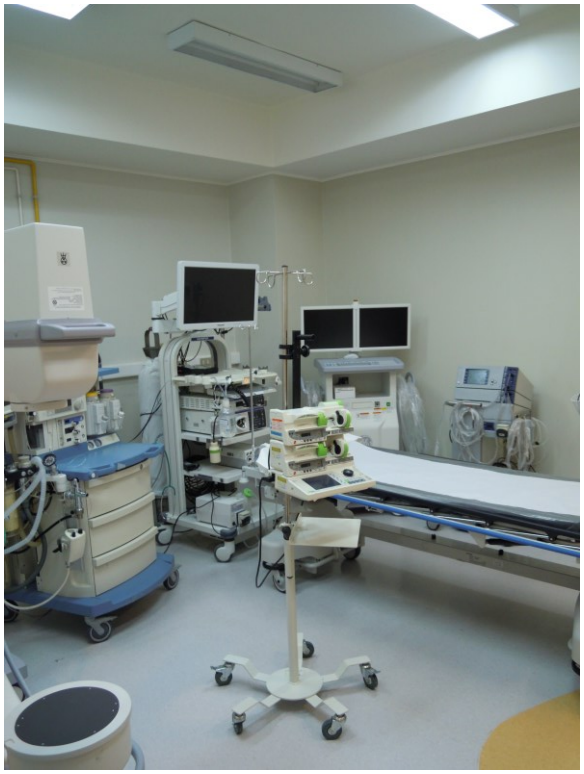
サン･ボルハ病院　内視鏡治療センター開所式

左よりソーヘンドラ夫妻、小田柿助教、ナバレッテ医師

内視鏡治療センター入口のボード

チリ保健省のプロジェクトの一環でサン ･ボルハ病院の日智消化器病研究所内に内視鏡治療センターが新たに設置され、その開所式が10月28日に催されました。センター長であるナバレッテ医師の恩師であるソーヘンドラ医師がドイツより来智し、オープニングセレモニーに出席されました。

同院はサンティアゴのPRENECの拠点でもあり、今後も連携を深め、チリの内視鏡治療の向上に貢献できればと思います。



内視鏡治療センターの様子

編集後記

先日、チリの南部でマグニチュード7．6と大きな地震が発生し、日本から多くのお見舞いのご連絡をいただきました。幸い、私どもの拠点の位置する首都サンティアゴはこの地震による影響はなく、震源となった南部でも死者、負傷者の報告なく最小限の被害でとどまりました。日本での熊本地震は記憶に新しいですが、地震多発国の両国、来年こそ大きな被害なく皆様が安心して過ごせますようお祈りしております。

今後も本Newsletterを通してLACRCの活動を報告してまいります。（早川美貴）

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 24, December 2016

［発行日］2016年12月31日
［制作］Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp

Newsletter

No. 25 March 31 2017

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

特別寄稿
チリ拠点長就任にあたり

平成29年2月より東京医科歯科大学チリ拠点長を拝命いたしました、北川昌伸でございます。平成17年より東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科の包括病理学分野を担当させていただいております。河野前拠点長が永年担ってこられたチリ拠点の活動の歴史を勉強させていただき、更にチリを含めた南米各国との交流が進むよう最大限の努力をする所存です。チリとの交流に関しては、大学執行部として田中雄二郎理事がご担当下さっています。田中理事のご指導の下、チリ拠点を大学の戦略に沿った国際展開活動の要とできるよう運営する必要があると考えます。

東京医科歯科大学は「日本の医療界のリーダーから世界の医療界のリーダーへ」の発展を目指して、日々努力を重ねております。スーパーグローバル大学創成支援事業に採択された本学は、これまで充実させてきた学部内でのグローバル化教育の一環としてハーバード大学、インペリアルカレッジをはじめとする多くの海外大学に多数の学生を派遣するとともに、チリ、タイ、ガーナに3つの海外研究拠点を設けて教育・研究活動を展開しています。チリ拠点はジョイント・ディグリー・プログラム（JDP）や大腸癌早期診断プロジェクト（PRENEC）といった本学の重要なプロジェクトを行う上での要所として果たす役割や責任は非常に大きなものと考えております。プロジェクトの円滑な運営を行うとともにさらに新たな活動の可能性の模索も含めて考えて参りたいと思います。

チリ拠点はこれまで河野前拠点長の監督のもと、多くの方々のご支援・ご協力の中で重要な業務を効率よく遂行して参りました。本ニュースレターでも多くの方々のご活躍の様子が数多く配信されております。現在は小田柿智之助教が駐在し、早川美貴事務補佐員とともに任に当たっておられますが、今後もチリ拠点の重要度は増すばかりと思われます。副拠点長に就任された植竹宏之教授のお力も大いにお借りして更なる発展を目指したいと考えております。宜しくご支援・ご指導賜りますようお願い申し上げます。

チリ拠点長
医学部長　北川昌伸

LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile

Contents

ご挨拶 1
JDプログラム 2
PRENECの進捗状況 3
活動報告 5

ジョイント・ディグリー・プログラム

本年２月６日、LACRCの小田柿助教が一時帰国した際に、チリ拠点の新拠点長となられた北川教授と、チリでの活動状況や今後の展開について意見交換をしましたので、その様子をお伝えいたします。

また、これまでジョイント・ディグリー・プログラム（以下、JDP）を総括する役割を北川教授が担っておりましたが、この度、北川教授が医学部長及び新拠点長に就任されたことから、本年４月からは小嶋一幸教授が新たに担当されることになりました。

新拠点長への活動報告

左より北川医学部長、小田柿助教

小田柿助教が、新拠点長である北川医学部長にPRENECの活動状況やプロジェクトセメスターの進捗状況等を報告しました。

また、４月の本学教員のJDP会議のためのチリ出張などを含めた今後の予定や各プロジェクトの展開などについて意見交換を致しました。

今後も本学と拠点で適宜情報を共有し、連携しながら、チリにおける各プロジェクトを進めていきます。

本学の国際活動に関する記事掲載

３月下旬に、JDPやPRENEC等の中南米諸国における本学の活動が、日本学術振興会サンフランシスコ研究連絡センターの第４２号ニュースレターで紹介されました。

このニュースレターは、日米の学術関係機関の研究者等を対象としたものであり、本学の活動が海外でも周知されることが期待されます。

http://www.jspsusa-sf.org/newsletter_j.html

JSPS
SAN FRANCISCO
NEWSLETTER

VOL. 42 | MAR. 2017

Tokyo Medical Dental University's Unique Activities in North and South America

Tokyo Medical and Dental University (TMDU) conducts a variety of unique academic projects under the educational philosophy: "to train medical professionals with a rich international quality," enhancing global competitiveness. Here are three representative examples related to North and South America.

Firstly, TMDU offers a doctoral program in medical sciences with the University of Chile, which is a pioneering joint degree program in Japan. Characteristically, TMDU and the University of Chile jointly organize curricula and confer an academic degree on a student completing the curricula under the names of the presidents of both universities. This program focuses on the research and clinical training in the areas of Upper Gastrointestinal Surgery, Colorectal Surgery and Gastroenterology. These are attractive, advanced and innovative courses that cannot be offered by a single university. Students study in both Chile and Japan so that they have chances to create international networks and careers and to be highly specialized medical professionals with international perspectives. Furthermore, the program plays a significant role in strengthening Japanese universities' international reputation and influencing and contributing to the improvement of higher education at the international level.

(Continued on page 10)

JSPS SF Newsletter | Vol. 42

(Continued from page 9)

Secondly, TMDU offers a research program named "Project Semester" for 4th- year medical undergraduate students who have completed major subjects and experiments. The aim is to cultivate fundamental skills that are necessary for medical doctors who have a scientific perspective. Students study and conduct their research at TMDU or overseas collaborating institutions, such as Imperial College, the University of Chile and Clinica Las Condes (CLC), Chulalongkorn University, and the Noguchi Memorial Institute for Medical Research, University of Ghana. Not only learning medicine abroad, but also facing the challenges of communicating with people from different cultures will benefit students in their future careers.

Thirdly, in January 2010, TMDU, Clinica Las Condes and the Ministry of Health of Chile (MINSAL) signed an international agreement to implement the "National Colorectal Cancer Screening Project" (PRENEC) with the aim of reducing colorectal cancer mortality rates in Chile. That year, TMDU also established the Latin America Collaborative Research Center (LACRC) which is one of three TMDU Overseas Satellite Offices together with the ones in Ghana and Thailand. LACRC is located within CLC and currently operates with one professional endoscopist from TMDU. Over the years, TMDU has dispatched several experts to Chile. As a result, Chilean professionals have been trained in endoscopic techniques and pathological diagnosis by TMDU experts, taking advantage of Japanese knowledge and technology, and thus creating a precedent in terms of diagnosis and effective treatment for colorectal cancer.

State of endoscopic guidance at the University of Chile

Representatives from the University of Chile paying a

日本学術振興会サンフランシスコ研究連絡センターニュースレターより抜粋

PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト（PRENEC）の最新情報をご報告いたします。現在、プンタ・アレナス、バルパライソ、サンティアゴの3都市において免疫学的便潜血反応検査（iFOBT）を用いた検診プログラムが進行しており、上記3都市に加えて、バルディビア、オソルノの2都市では免疫学的便潜血反応検査（iFOBT）の登録者数を伸ばしております。 またPRENECはチリ国内のみにとどまらず、他の南米諸国へと動きは広まりつつあり、本号ではその様子をお伝えしてまいります。

第三国研修後のモニタリング出張

昨年８月に開催されたJICA・AGCID（国際協力庁）共催の第三国研修後の成果、進捗状況を評価する目的で、LACRCからは小田柿助教、CLCからロペス医師、ポンセ看護師が本年１月５・６日に研修参加国のパラグアイとボリビアを訪れました。 パラグアイでは、第三国研修後にPRENEC参加への準備を順調に進めてきており、今回の出張の際に、パラグアイ保健省、パラグアイ国立がん研究所及び CLCの三者間にて大腸がん早期発見パイロット・プロジェクトへ参加する協定を締結しました。このプロジェクト終了後に正式なPRENECへの参加が予定されています。一方、ボリビアにおいても、パイロット・プロジェクトに関する協定を早急に締結すべく準備を進めているとの報告がありました。

パラグアイにおける会食の様子

ボリビアにおける会議の様子

ロペス医師の本学訪問

2017年度の体制に関する会議のために、PRENECのチリ側の責任者であるロペス医師が、3月30日に本学を訪問しました。本会議には、田中理事、北川医学部長、植竹教授、岡田講師、伊藤助教、CLCから本学へ留学中のサラテ医師が参加し、今年度の第三国研修やENDOSURについても協議されました。

また、本会議終了後に、田中理事よりロペス医師に客員教授辞令が授与されました。

会議参加者による記念撮影

田中理事による客員教授辞令授与の様子

PRENEC啓発活動

チリ国内ニュース番組 「24H」

本年3月、大腸がんについての知識を広めるため、チリの主要テレビ局であるTVNのニュース番組「24H」にロペス医師が出演しました。番組内では大腸がんの症状や治療方法が取り上げられたほか、PRENECの活動が紹介されました。

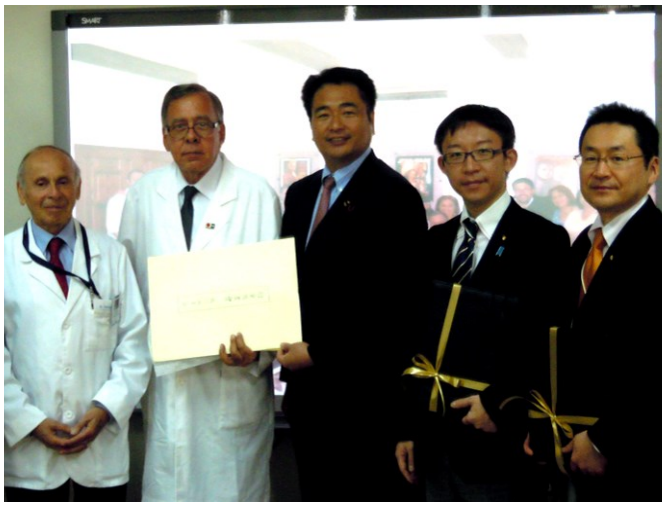
こういった広報活動を続けることで、チリ国内におけるPRENECの更なる拡大が期待されます。

LACRC活動報告

ODA調査団によるサン・ボルハ病院視察

本年2月28日、政府開発援助（以下ODA)調査団がサン・ボルハ病院日智消化器病研究所に視察に訪れました。今回の視察は、ODAをめぐる諸問題や当地での活用度合いを調査する目的にて行われ、松下参議院議員、中西参議院議員、磯崎参議院議員がODA調査団として来智しました。研究所関係者の他、在チリ日本大使館より二階大使、CLCよりロペス医師、ポンセ看護師、LACRCより小田柿助教等が参加しました。

現場視察に加えて、エステラ所長より、研究所と我が国の40年間の協力の歴史概要について説明が行われました。その際に、本学が2010年から現在まで協力してきているPRENECについても言及され、同病院が臨床研究の場となっていることが強調されました。



左よりベラ院長、エステラ所長、松下参議院議員、中西参議院議員、磯崎参議院議員

ODA調査団及び二階大使との記念撮影

編集後記

この度、文部科学省研究奨学制度にて平成29年4月より名古屋大学大学院国際開発研究科へ約2年半留学することとなりました。今まで携わらせていただいたLACRCにおける活動を通して、国際関係・開発をさらに深めたいと思い、今回の留学を決心致しました。

名古屋行を数日後に控えて、期待と不安、寂しさが入り混じった複雑な心境ですが、この場をお借りして、かけがえのないこの4年間に、一緒に働く機会を持てた皆様に心より感謝を申し上げたいです。皆様より学んだこと、一緒に過ごした楽しい時間は決して忘れることはなく、日本での留学を終えた後は、またLACRCで皆様と再会し、一緒に働ければと思っています。皆様のことは私の記憶と心に深く刻み込まれていることは言うまでもありません。 ありがとうございました。またお会いしましょう！（ハイメ・ウレホラ）

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 25, March 2017

［発行日］2017年3月31日
［制作］Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp

Newsletter

No. 26 June 30 2017

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

HospitalとClínicaの違い

Hospital（病院）とClínica（クリニック）の違いはご存知でしょうか？

日本では、病院とクリニックは病床数で定義されます。「20床以上の入院施設を持つ医療機関」が病院で、「19床以下のもの」がクリニックとなっています。例えば、本学のような大きな規模の医療機関が病院、個人で開業している小規模な医療施設はクリニックといった具合です。クリニックは診療所、医院などと同意語です。

一方、チリを含めた南米での定義は全く異なります。Hospitalは、「公立病院」、Clínicaは「私立病院」を意味します。日本の健康保険は、国民皆保険制度であり、基本的に全国民が希望する医療機関で診療が受けられますが、チリには一部の富裕層が加入する民間保険「ISAPREs」とそれ以外の方が利用する公的保険「FONASA」の主に2種類の健康保険に分けられ、FONASAの患者は公立病院であるHospitalで、ISAPREs の患者は私立病院であるClínicaで診療を受けます。割合としては、国民の70−80%の方がFONASAを利用しています。

十分とは言えない行政からの補助で成り立つHospitalは一般的に設備が悪く、患者も溢れかえり、何年も検査を待たされ、待っている間に患者が亡くなることもしばしばあります。一方で、自由診療のような私立病院は、診療費が非常に高額であるものの充実した設備を備えています。医師の給料に関しても、HospitalとClínicaは雲泥の差で、多くの医師がHospitalとClínicaを掛け持ちしています。人にもよるのでしょうが、Hospitalで地域医療に貢献し、Clínicaで自分や家族のためにお金を稼ぐといった医師が多いように感じます。

大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)はFONASAからの予算を使いHospitalで運営しています。設備不良だけでなく、病院職員（看護師や助手も含む）のストライキや、内視鏡検査の歩合がClínicaよりも悪いためにチリ人検査医師がなかなか見つからない、など多くの問題を抱えています。

こうした現状に直面しながら本学はチリの医療に貢献しています。最新の知見や技術を伝えることも勿論重要ですが、我々のように底辺を上げるような活動も、非常に重要なことではないかと思っています。PRENECがチリ全土に広がり、日本同様に、大腸がん検診が国の政策となる日に向かって、拠点員として出来ることを頑張っていきたいと考えています。

小田柿　智之　　消化器病態学分野

LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile

CLC CLINICA LAS CONDES

Contents

ご挨拶 1
JDプログラム 2
PRENECの進捗状況 4
プロジェクトセメスター 6
活動報告 7

ジョイント・ディグリー・プログラム

ジョイント・ディグリー・プログラム（以下JDP）における本学とチリ側の執行部・教員の関係の強化、及びプログラムの詳細を協議するため、本学の北川昌伸医学部長、小嶋一幸教授、植竹宏之教授、荒木昭博准教授、下田弘二学長戦略企画課長、福井美子通訳の6名からなる訪問団が、4月10日から13日までチリを訪れました。
本号ではその様子をお伝えいたします。

本学の訪問団、JDP医学部長会議及び学術委員会へ出席

JDP医学部長会議の様子

4月10日、本学からの訪問団がチリ大学医学部で開催されたJDP医学部長会議に参加しました。チリ大学よりククルジャン医学部長、オライアン教授、フルクサ医師、アウマダ氏、クリニカ・ラス・コンデス（以下CLC）よりトレス准教授、ブルディレス教授が出席しました。この会議ではJDPに関する学則や、外部評価委員の設置に向けた双方の外部委員の選出、新たな分野でのJDPの可能性等について協議しました。今後は少なくとも年に1回は、本会議が開催される予定です。

当該会議の後に、JDP学術委員会会議が開催されました。消化器内科及び上部消化管外科の各コースにおける 日本とチリ間の臨床教育科目の定義の違いをふまえた話し合いが中心に行われました。

また、これらの会議の最後に北川医学部長がククルジャン医学部長、オライアン教授に本学の客員教授辞令を授与しました。

北川医学部長による客員教授辞令授与の様子

チリ大学側主催の夕食会での記念撮影

CLC、チリ大学附属病院及びエル・サルバドール病院視察

チリ大学臨床実習先となっている、CLC、チリ大学附属病院及びチリ大学の関連病院である エル・サルバドール病院への視察が行われました。CLCでは、内視鏡室と昨年増設された手術室を中心に、チリ大学附属病院では、手術室、集中治療室、内視鏡室、放射線検査室の視察が行われました。エル・サルバドール病院では、施設見学に加え、日本とチリとの医療システムの違いなどに関して、ウリベ教授、ブスタマンテ外科部長、カタン外科サービス長と意見交換をしました。

チリ大学附属病院正面玄関での記念撮影

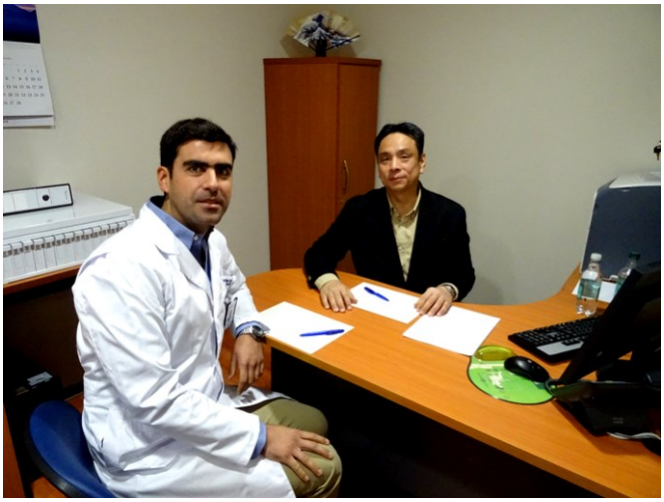
エル・サルバドール病院関係者との意見交換の様子

植竹教授によるJDP学生への指導

大腸肛門外科学コースのJDP一期生であるサモラーノ氏に日本側の指導教員である植竹教授が個人指導を行いました。

臨床実習及び研究論文の進捗状況に関して確認した後、基礎研究演習の一環として、本学からの訪問団に対して、サモラーノ氏が“miRNA DIFERENTIAL EXPRESSION IN COLORECTAL CANCER CMS4 AS A POTENTIAL PLASMATIC BIOMARKER (大腸がんの予後に関わるmiRNAの解析)” に関する研究発表を英語で行いました。発表後には、訪問団の先生方との質疑応答がありました。

今後、より良い研究が展開されることが期待されます。



サモラーノ氏への個別指導の様子

PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト（PRENEC）の最新情報をご報告いたします。現在、プンタ・アレナス、バルパライソ、サンティアゴの3都市において免疫学的便潜血反応検査（以下iFOBT）を用いた検診プログラムが進行しており、上記3都市に加えて、バルディビア、オソルノの2都市ではiFOBTの登録者数を伸ばしております。

新たに本年4月よりコキンボにおいてはiFOBTの開始、ボリビアにおいてはパイロットプロジェクトへの調印が締結され、6月には、パラグアイにおいてiFOBTが始動、また、新たな国内PRENEC参加候補地としてイキケにおいて啓発活動が行われました。

パラグアイにおけるパイロットプロジェクトの開始

パラグアイ国立がん研究所の看護師ら

パラグアイ保健省、パラグアイ国立がん研究所及び CLCの三者間にて締結された大腸癌早期診断パイロットプロジェクトへの協定に基づき、2017年6月から免疫学的便潜血反応検査が始まりました。

大腸がんの死亡率が増加するパラグアイにおいて大きな前進となりました。

イキケにおける啓発活動

チリ北部に位置するイキケ市はタラパカ州（第1州）の州都で、以前は硝酸塩の輸出港として栄えた都市です。

6月30日、7月1日の2日間にわたり、PRENEC責任者であるロペス医師等がイキケを訪れ、現地の代表であるロメロ医師とともに、大腸がん検診啓発活動を行いました。

期間中に行われたセレモニーでは、ロッシ上院議員が参加しました。

通例に従って、巨大な大腸模型をモール内に展示して一般市民を対象に早期発見・早期治療の大切さを呼びかけました。

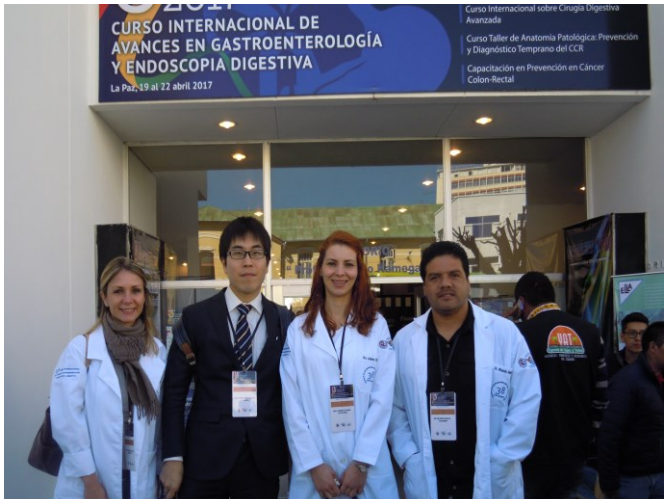
イキケ関係者と記念撮影

ボリビア出張

本年4月に、PRENEC責任者のロペス医師、ペニャローサ医師、ポンセ看護師とともにLACRCから小田柿助教が、JICA消化器病学及び消化器内視鏡診断アバンストコ―スに演者として招聘され、ラ・パスの日本・ボリビア消化器疾患研究センター（IGBJ ）を訪れました。このコースと同期間に、巨大結腸モデルを用いた大腸がん検診啓発活動が開催され、その際、PRENECのパイロット・プロジェクトに関する協定が正式に締結されました。

また、本コースに招聘された長崎大学の医師ら（平山教授、江口教授、足立助教、小林助教）とともに在ボリビア日本大使館の古賀特命全権大使への表敬訪問を行いました。 本出張を通して、長崎大学の先生方とは、国際協力活動に関して意見交換をする機会が多々あり、非常に有意義なものとなりました。

大腸がん啓発活動セレモニーの様子



コースに参加した医師らと記念撮影

長崎大学の医師らと古賀特命全権大使（右より3番目）

巨大結腸モデルを用いた啓発活動の様子

プロジェクトセメスター

本学は、2010年～2014年の間、学生海外基礎医学実習（プロジェクトセメスター）の目的で、医学科4年生を約4～6カ月に渡ってチリの研究施設に派遣していましたが、この度3年ぶりにチリにおけるプロジェクトセメスターが再開しました。

今年度は2名の学生がチリ大学の研究室に所属し、6月初旬より研究に取り組んでいます。南米という日本と異なる環境下で、研究生活は勿論のこと、チリ人との交流を通して、異文化に触れ、多くのことを感じ、学び、有意義な日々を過ごしてくれることを願って、LACRCはサポートを行ってまいります。

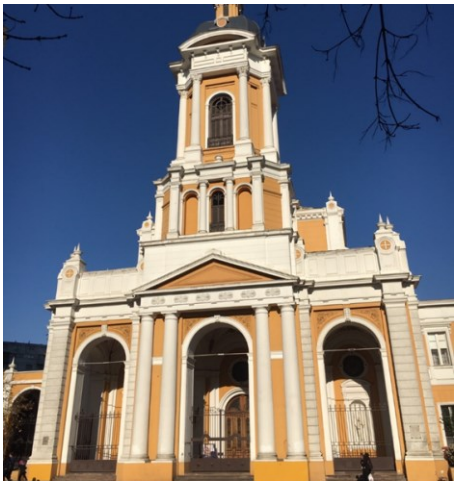
プロジェクトセメスター学生の抱負

小島原知大　チリ大学　腎臓病学研究室所属 『南米よりご挨拶』

こんにちは。5月末よりチリ大学医学部に派遣されております、医学科4年の小島原知大です。チリ生活も1か月経過し、新しい環境にも少しずつ慣れてまいりました。

現在、チリ大学医学部の統合生理学教室で高血圧の新たな病理像について研究しています。私自身のプロジェクトとして立ち上がったテーマであり、手技の練習をしながら仮説の設定、実験の方法までデザインして理論を固めています。手技を行う前に理論を咀嚼することで実験へのビジョンがクリアになっていくことを実感しています。

このような貴重な機会を与えてくださった包括病理学の北川教授、アカデミックにサポートいただいている腎臓内科学の内田教授、公私ともにご支援いただいているLACRCの小田柿助教、早川さん、マルガリータさん、現地での交友関係を築いていただいた歴代チリ派遣の先輩方、関わっているすべての方への感謝を忘れずに留学後によい報告をいたしますので、日本の裏側へのご声援よろしくお願いします。



休みの日にはカメラ片手に散歩(ディビナ協会)

鈴木圭人　チリ大学　感染症学研究室所属 『チリ生活への抱負』

今年度チリ派遣学生の鈴木圭人と申します。日本とはまるで違う文化圏での生活がスタートし、早くも一ヶ月が経とうとしています。教科書とは聞こえ方が全く違うスペイン語にもサンティアゴの生活にも少しずつ慣れて来ました。

現在、私はチリ大学医学部小児感染症学Miguel O'Ryan先生の研究室に所属させていただています。研究テーマはノロウイルスとロタウイルスの小児感染です。11月までの留学期間でしっかりと研究のいろはを身につけられるようにと、O'Ryan先生はじめMedical Technicianの方や看護師の方、先輩方が手厚くサポートしてくださり、研究プロトコルの立案段階から唾液試料を実際に病院で集め、実際にラボで作業をし、最後に統計分析を行うまでの流れを全て自分でやらせていただけることになりました。現在は地道に先行研究を調べ、背景知識を整理し、プロトコルを立案している段階ですが、間もなく、実際にラボでの作業が始まる予定なので、とても楽しみです。

本学、チリ大学をはじめ、今回の留学は本当にたくさんの方にサポートしていただいています。この素晴らしい機会を全力で走り抜けたいと思います。

写真は通っている研究室。サッカーの試合があれば研究室でも観戦するのがチリスタイルです。

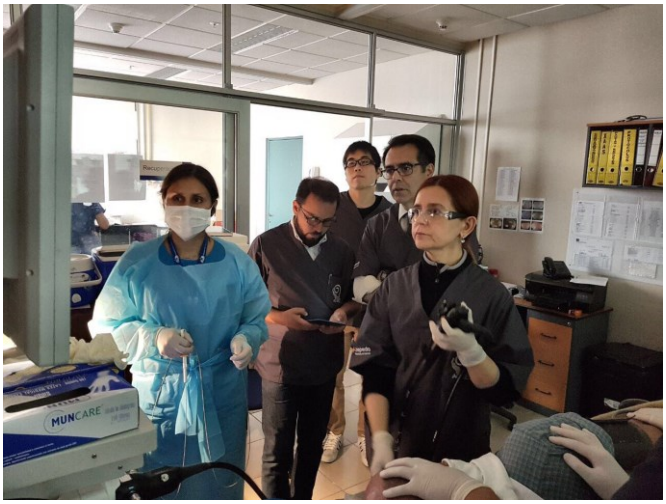
LACRC活動報告

胃がん検診プロジェクトへの参加

本年5月から8週間にわたりチリの南部、ヌエバインペリアルという都市で、アメリカ国立がん研究所（NCI）の協力の下、チリ内視鏡学会主催で、上部消化管スクリーニング(胃がん検診)に関する臨床研究が行われました。

チリの地方都市では、不十分な設備や内視鏡医師不足が原因で、内視鏡検査は数年待ちの状況です。今回のプロジェクトでは最初の6週間は待機患者を無くすことが目的で、最後の2週間は、ピロリ菌検査等で選定された胃がんハイリスク患者を中心に検査を行いました。チリ人検査医師への指導医として、九州大学の森山医師、神戸大学の石田医師、スペイン人のパラ医師、ウルグアイ人のゴンザレス医師とともに、LACRCから小田柿助教が招聘されました。

PRENECでの活動のみならず、こういった活動を通しても、チリの医療に貢献していければと思います。



小田柿助教による内視鏡指導の様子

プロジェクト関係者とともに記念撮影

神戸大学より招聘された石田医師と記念撮影

九州大学より招聘された森山医師（右から2番目）と記念撮影

チリ空軍病院見学

５月２２日、本年３月～５月にPRENECの大腸内視鏡トレーニングに参加していたセレドン医師から、彼の所属するサンティアゴ市内公立病院Hospital FACH (チリ空軍病院) に小田柿助教が招待されました。同院の消化器科医師や内視鏡室のスタッフ、マジョール大学の学生等を対象に、「PRENECにおける日本人医師の役割」「大腸内視鏡検査」に関する発表を行いました。

発表後は、内視鏡室や手術室などの施設見学を行い、スタッフらとの交流を深めました。

セレドン医師(写真右)と病院関係者と記念撮影

チリ空軍病院外観

編集後記

初めまして。バルハ・マルガリータと申します。チリ拠点で秘書・事務業務コーディネーターとして３月から務めております。前任のハイメさんと同じで、サンチアゴ大学で英日西を勉強致しました。

以前は、チリに拠点を置く日本総合商社で秘書として２年半位働いておりました。分野は違いますがLACRCでの様々な活動を通して日々学んでおります。

何かありましたら是非ご連絡ください。喜んでお手伝いさせていただきます。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 26, June 2017

［発行日］2017年6月30日
［制作］Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp

Newsletter

No. 27 September 30 2017

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

継続は力なり

本学とチリの交流の歴史は古く、1968年に本学の当時の第一外科、村上忠重教授がサンティアゴで、早期胃がん診断と治療に関する講演をしたことが始まりとなっています。その後も、チリとの関係は継続され、1977年にはサン・ボルハ病院内に日智消化器病研究所が設立されました。それから40年経った現在、日智消化器病研究所は、大腸がん早期診断プロジェクト(PRENEC) のサンティアゴの拠点として重要な役割を果たしています。

ニュース等でご存知の方も多いかと存じますが、9月25日から10月2日にかけて、日本との外交関係樹立120周年を迎えたチリと国際親善を深めるために、秋篠宮殿下・妃殿下がチリに公式訪問されました。滞在期間中の9月27日には日智消化器病研究所にも、ご視察にいらしてくださいました。

両殿下の短いチリ滞在期間に、本学の活動の場である日智消化器病研究所をご視察先として選定して頂いたことは、本学とチリとの40年以上に渡る交流を評価して頂いたことに他なりません。

この度、両殿下に拝謁し、本学の活動等をご説明させて頂く機会を頂けたことは、私のような若輩者にとって大変光栄でした。両殿下からは励ましのお言葉を頂き、チリで勤務していくうえでの大きな励みとなりました。

このような機会を頂くことが出来たのも、先輩方が40年以上の間、チリとの交流を絶やさずに続けてきたからです。困難な時期もあったかと思いますが、まさに「継続は力なり」で努力してきた結果なのでしょう。私も、その時出来ることを精一杯やって今後に繋がっていくよう頑張っていければと思います。今後とも宜しくお願い申し上げます。

小田柿　智之　　消化器病態学分野

LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile

CLC CLINICA LAS CONDES

Contents

ご挨拶 1
秋篠宮殿下・妃殿下チリ訪問 2
JDプログラム 3
PRENECの進捗状況 4
プロジェクトセメスター 7
活動報告 8

秋篠宮殿下・妃殿下のチリ公式訪問

国立サン・ボルハ病院内の日智消化器病研究所をご視察

本年9月27日に、チリと日本間の外交関係樹立120年の記念式典にご出席されるため、チリをご訪問中の秋篠宮殿下・妃殿下が、国立サン・ボルハ病院内の日智消化器病研究所をご視察されました。

日智消化器病研究所ではバルトロメ医師（保健省首都圏州中部医療サービス局副局長）、ベラ医師（サン・ボルハ病院長）、ジョレンス医師（日智消化器病研究所初代所長）、エステラ医師（同研究所現所長）らが、秋篠宮殿下・妃殿下をお迎えしました。

エステラ医師が、本学と同研究所との40年にわたる医療技術協力の説明をしました。

小田柿助教は、本学におけるチリでの活動や、内視鏡検査の流れ、内視鏡検査室や草の根・人間の安全保障無償資金協力で同研究所へ供与された内視鏡等の説明をし、秋篠宮殿下・妃殿下からは多くの関心を寄せていただきました。

28 de septiembre de 2017

Príncipe y princesa de Japón visitan el Hospital Clínico San Borja Arriarán

Este miércoles 27 de septiembre, el Hospital Clínico San Borja Arriarán recibió la visita del príncipe y la princesa de Japón, Akishino y Kiko, en el marco de la conmemoración de los 120 años de relaciones diplomáticas entre Chile y Japón.

Algo de historia entre Japón y el HCSBA

La relación entre el hospital y Japón se remonta al año 1970, cuando la Agencia de Cooperación Internacional de Japón (JICA), inicia cursos de 3 meses de duración en Tokio sobre detección del cáncer gástrico, dirigido a médicos extranjeros, los cuales se mantuvieron hasta el 2014.

En 1977 el Dr. Pedro Llorens, fundador del instituto, impulsó el Proyecto de Control del Cáncer Gástrico, que contribuyó al desarrollo de las técnicas de diagnóstico del cáncer gástrico, que se extendió hasta 1982. Mientras que de 1981 a 1995 se capacitó a médicos de distintos países latinoamericanos en Chile.

En 2010 se da origen al Proyecto de Prevención de Neoplasias Colorrectales (PRENEC) a través del convenio entre el Ministerio de Salud, la Universidad Médica y Dental de Tokio y la Clínica Las Condes, el cual se inició en el HCSBA durante julio del mismo año.

Entre los equipamientos donados se encuentran: microscopios, micrótomo, endoscopios con cámaras y TV, sistema de laparoscopía y de radiología, entre otros. La última donación fue de $47 millones, destinados a la compra de 5 endoscopios y la reparación del pasillo interior del Instituto Chileno Japonés.

A la fecha, son 35 médicos y profesionales chilenos capacitados en Japón, 80 médicos y profesionales japoneses enviados a Chile y 118 profesionales de Latinoamérica que se han especializado en nuestro país a través de los cursos internacionales.

“秋篠宮殿下・妃殿下、サン・ボルハ病院をご訪問”

チリと日本の間で国交樹立120年周年を迎え、チリに公式訪問をされている秋篠宮殿下・妃殿下(紀子さま)が9月27日にサン・ボルハ病院にいらっしゃいました。

≪中略≫

1981年から1995年にかけて、ラテンアメリカの様々な国の医師等を対象とした国際消化器病研修がチリで行われていました。そして、2010年、チリ保健省、東京医科歯科大学（以下TMDU)及びクリニカ・ラス・コンデス(以下CLC) 間の協定により大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)が始まり、サン・ボルハ病院でもこのプロジェクトが開始されました。

今まで日本から供与を受けたものは、顕微鏡、マイクロトーム、内視鏡スコープ、テレビ、腹腔鏡システム、放射線システム等です。また、最近では47，000，000チリペソが寄付され、5本の内視鏡の購入、日智消化器病研究所の内装補修工事に充てられました。

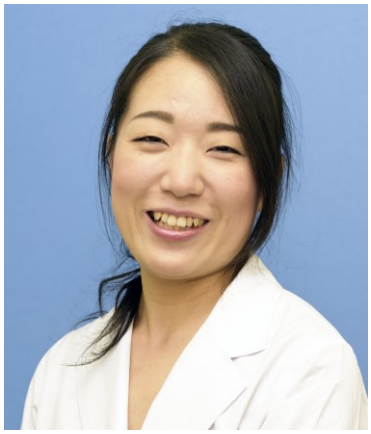
今までに、35人のチリ人医師や専門家が日本で研修を受け、80人の日本人医師や専門家がチリへ派遣され、118人のラテンアメリカの専門家が国際研修を受講しました。

（チリ保健省掲載記事より内容を抜粋）

ジョイント・ディグリー・プログラム

ジョイント・ディグリー・プログラム (以下JDP) の平成29年度10月入学の試験が、8月に本学及びチリ大学合同の学術委員会により行われ、第二期生となる学生が2名選出されました。本号では、各学生の入学に対する思いを掲載しています。

平成29年度10月入学JDP学生の決定



松宮由利子　医師

初めまして。この度、平成29年度JDP二期生として入学することとなりました。
今回、JDPに参加できますことを心から嬉しく思うとともに、協力していただきました方々に心から感謝を申し上げます。このプログラムでは、東京医科歯科大学のみならず、南米で随一の優れた学術機関であるチリ大学で研究の基礎・実践を学ぶことが出来ます。歴史あるチリ大学で学べることは大変光栄で、期待で胸がいっぱいです。
チリという、地球の真裏の地で、不安がないかと言われると嘘にはなりますが、それ以上に、これから出会える全てのことが楽しみで、これから学ぶ知識や技術を一生懸命吸収してきたいと思います。
最後になりますが、チリという国がとても好きになって、次への架け橋となっていけるように頑張ります。

ラファエル・アルトゥーロ・サナブリア・カイチェ医師

私はエクアドル出身の一般外科医師です。エクアドル国内やラテンアメリカの様々な地域で仕事をする中で、医学における研究と教育には学術的な要素が必要だと感じました。
チリ滞在中に本プログラムを知る機会があり、これまでの実績に感銘を受け、肝胆膵外科学と肝臓移植の分野に興味があったことで、同分野に入学を志願しました。両大学が連名で授与するPhDの学位を得られることは私にとって最大のメリットですし、日本で学ぶことで、自身の経験や技術を向上させることができればと思っております。
両大学から指導を受けることで、新しい知識を取り入れ、質の高い研究を行っていきたいと思います。宜しくお願い申し上げます。

PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト（PRENEC）の最新情報をご報告いたします。現在、バルパライソにおけるPRENECが、病院の予算確保の問題で、低迷しているものの、プンタ・アレナス、サンティアゴ、バルディビア、オソルノ、コキンボの5都市と、さらには、国外ではパラグアイで、免疫学的便潜血反応検査（以下iFOBT）を用いた検診プログラムが順調に進行しております。

7月にコンセプシオン市の医療チームを対象としたPRENEC講習会が行われ、8月にはJICA・AGCID後援のもと第三国研修が開催されました。また、9月には新たな国内PRENEC参加候補地としてロス・アンヘレスにおいて大腸コロンモデルを使用した啓発活動が行われました。

本号ではPRENEC講習会と第三国研修についてお伝え致します。

PRENEC講習会

本年7月24・25日の2日間にわたって、グラント・ベナベンテ病院（コンセプシオン市）の医師、看護師等を対象にPRENEC開始の為の講習会が開かれました。

本講習会では新規参加に必要な設備や運営方法、便潜血検査、データの取り扱いなどに関する説明の他、実際にサンティアゴ地区で患者登録を行っている保健センターの見学も行われました。小田柿助教からは、「PRENEC研修医師への指導方法」についての発表が行われました。

本講習会を通して、新規拠点におけるPRENECが早急に開始されることが期待されます。

講習会参加者と記念撮影

保健センターへの見学の様子

第三国研修

本年で3回目となる JICA・AGCI（チリ国際協力庁）後援の第三国研修がペルー及びコロンビアの医療チームを対象に開催されました。昨年同様、本学から岡田卓也講師と伊藤崇助教が、JICA専門家として招聘され、LACRCの小田柿助教、ロペス医師、PRENECスタッフらと共に指導にあたりました。研修は8月28日から5日間に渡り行われ、会期中の前半は、サンティアゴで各分野の講義やコロンモデルを用いた内視鏡の実技指導を行いました。後半は、プンタ・アレナスに移動し、PRENECの最初の拠点であるマガジャネス病院の見学、及び、小田柿助教がPRENECの現地での対応困難な症例の内視鏡治療を行いました。また、最終日には、プンタ・アレナスにおいてのPRENECが5周年を迎えることから記念式典が開催され、研修参加者にこのプロジェクトの歴史を知ってもらう良い機会となりました。

この研修会は本年を持って終了となりますが、今後も第三国研修に代わる機会を通して南米でのがん検診の普及に貢献してまいります。

開講式での記念撮影

開講式にご出席いただいた在チリ日本大使館の倉田書記官とヤマモト氏

講義を受ける研修参加者ら

研修参加者との記念撮影

伊藤助教による発表の様子

岡田講師による実技指導の様子

小田柿助教による内視鏡治療の様子

岡田講師による発表の様子

JICAのベラ氏と記念撮影

夕食会の様子

プロジェクトセメスター

本学の学生海外基礎医学実習（プロジェクトセメスター）の学生が本年6月よりチリ大学にて研究活動を行っています。
本号では彼らのチリ滞在記をお伝え致します。

学生チリ滞在記

鈴木圭人　チリ大学　感染症学研究室所属

時が経つのは早いもので5月に始まったチリでの生活も折り返し地点を過ぎ、研究も本格的に結果を出しデータをまとめる段階に来ています。
生活面のご報告としては、当初、英語でコミュニケーションをとっていた友達やラボの方と、ほとんどスペイン語で話せるようになりました。まだまだ流暢にコミュニケーションはとれませんが、日々成長を感じることができ達成感があります。現地の言葉で話すと、その言葉でしか表せない繊細な感覚をそのまま共有することができるので面白いです。
さて、9月はチリ独立記念日の18（ディエシオチョ）という国民の一大イベントがあり、その前後でFonda（フォンダ）というお祭りが各地で開かれました。チョリパンやエンパナーダといったチリの代表的料理を片手にテレモートなどの国民的カクテルをたくさん飲むというとてもチリらしいお祭りです。写真はチリ大学 Antumapuキャンパスでの Fondaでチリ北部の方から来た方が現地の伝統舞踊を踊っているところです。大学のイベントでもこの様に国の文化的芸能を楽しめるのはとても素晴らしいことだと思いました。
残り2ヶ月をきったチリ留学生活を最後まで充実した時間にしたいと思います。

チリ北部の伝統舞踊の様子

小島原知大　チリ大学　腎臓病学研究室所属

５月末よりチリ大学医学部に派遣されております、医学科4年の小島原知大です。チリでの生活も残りわずかとなり、春の陽気を感じながら研究生活を送っています。
チリという新しい環境での研究生活によって、手技が向上したのはもちろんのこと、ひとつの実験を終わらせた後に「このことから何が言えて、次にすべきことは何か」を必ず考えるように指導されるため、リサーチマインドも育ちました。現在は、樹状細胞での遺伝子発現をメインプロジェクトとして、血液・尿中のNa/K濃度測定、スーパーオキシドの測定などサブプロジェクトも充実しています。
最初はどうなるかと思われたスペイン語の方も、ラボメンバーや現地の友達のおかげで少しずつ聞けるように、話せるようになり、研究に加えて得られた成果として大事にしたいと思います。
チリ・日本問わずサポートいただいている皆様への感謝の気持ちを忘れずに、残りの期間がより充実したものとなるように精一杯取り組みますので、応援よろしくお願いします。

休みを使ってイースター島に行ってきました。このモアイは大阪万博の時に来日しているそうです。

LACRC活動報告

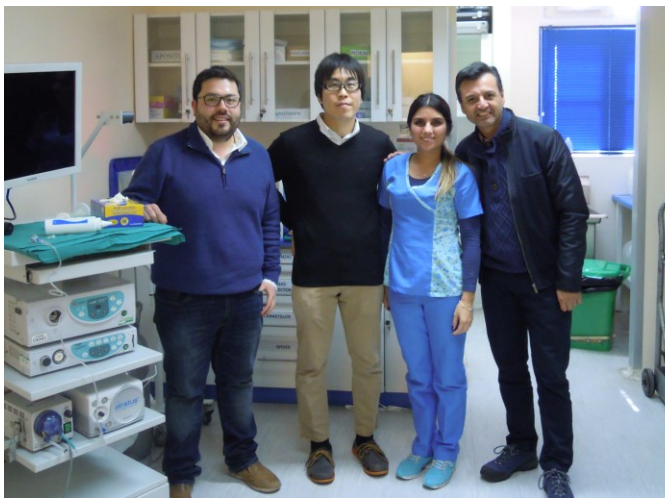
チリ国内病院における困難症例の内視鏡治療

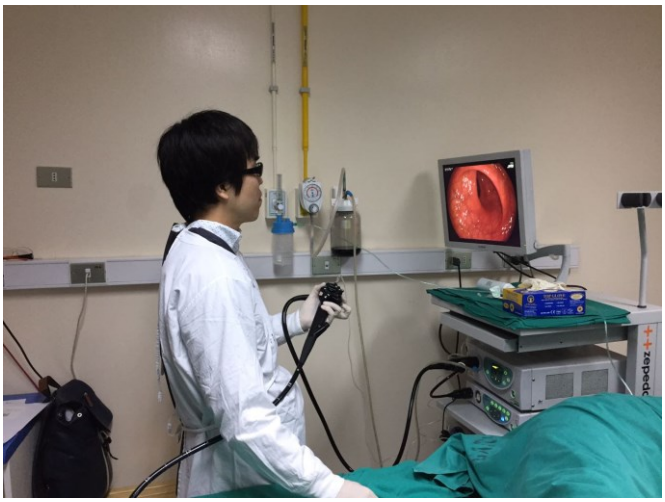
LACRCの小田柿助教は、チリ国内の公立病院の要請を受けて、現地の医師では対応困難な症例の内視鏡治療のサポートを行っています。

本年7月25日、サンティアゴのチリ国立がん研究所では早期食道がんの内視鏡的粘膜切除術（EMR)を行い、8月14日、バルパライソのペレイラ病院では大腸腫瘍に対してEMRを施行しました。チリの公立病院では、十分な治療器具や物品が得られず、日本のようにスムーズに行かないことが多々あるため、工夫を凝らし、柔軟に取り組む姿勢が必要です。今後も、チリ人医師の技術の向上に寄与していきます。

チリ国立がん研究所外観

チリ国立がん研究所スタッフらと


ペレイラ病院スタッフらと


ペレイラ病院で内視鏡治療を行う小田柿助教

アルゼンチン消化器内視鏡学会に参加

本年９月７日、アルゼンチン消化器内視鏡学会（Gastro Rosario）のライブセッションに、サン・ボルハ病院の内視鏡センタープロジェクトのチームがチリからアルゼンチンへの中継で参加しました。

小田柿助教も参加し、ブラジル出身のアランテス医師と共に、早期胃がんに対して粘膜下層剥離術（ESD）を施行しました。アルゼンチンを始め、多くの南米の医師らからの関心を集めました。

このような一つ一つの取り組みが、南米の医療の向上の一助となることを願っております。

ライブセッションの様子

アランテス医師との記念撮影

編集後記

本号でお伝え致しましたように、チリと日本の間で国交樹立１２０周年を迎えたことから、秋篠宮殿下・妃殿下の公式訪問を始め、日本からの専門家や文化人を招いた講演会やコンサート等の記念事業がチリの各地で開かれています。両国はほぼ地球の反対側に位置していますが、今回の記念行事を通して、距離が近くなったように感じます。今後もNewsletterを通じて近況を報告して参ります。より良い誌面を作成する為、皆様からのご意見・ご要望がございましたら気軽にLACRCオフィスまでご連絡くださいませ。（早川美貴）

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 27, September 2017

［発行日］2017年9月30日
［制作］Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp

Newsletter

No. 28 December 31 2017

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

チリ拠点を訪れて

ニュースレター28号の巻頭文を書かせていただくのは、本学消化管外科の安野正道（准教授、本学1987卒）でございます。

クリニカ・ラス・コンデス（以下CLC）内にあるラテンアメリカ共同研究拠点（以下LACRC）は、チリの大腸癌診断・治療の標準化に成果をあげています。チリ国内にとどまらず、エクアドルなどに活動を拡げ、プロジェクトセメスター学生のチリ大学やCLCでの研究も支援してきました。

このように存在感を増しているLACRCの活動を外科領域にも拡大できないかと、ラテン気質？外科医の筆者が、11月14日から12月4日までチリ・サンティアゴ市に派遣されました。バチェレ大統領任期満了総選挙に伴う公立病院のストライキなどのアクシデントに見舞われたものの、LACRCの小田柿智之助教、早川美貴さん、Margarita Barjaさん両補佐員のご尽力で、CLCだけでなく、国立サン・ボルハ病院、チリ大学附属病院、国立マイプ病院で、カンファレンスや病棟回診、手術に参加し、レジデントやフェローを含む多くの外科医たちと公私にわたる楽しい交流ができました。

CLCでは、キャンサーボードにおける私の提案が採択され、直腸癌手術後の骨盤内再発例に手術指導して、チリ初の骨盤側方リンパ節郭清術（内腸骨血管合併切除）を成功させることができました。

CLCの位置するラス・コンデス地区は近代的な建物と緑が共存して美しい新市街地で、郊外のワイナリーも素晴らしく、一度サンティアゴを訪れてみられることをお勧めします。

消化管外科学分野　安野正道　准教授

骨盤側方リンパ節郭清成功。術者ロペス医師（左）、筆者（右）

ワイナリーViña Casas del Bosque
（https://www.casasdelbosque.cl/）
カストロ医師(左)、サラテ医師(中央)、筆者(右)

LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile

Contents

ご挨拶 1
ベルナルド・オヒギンス勲章 2
JDプログラム 3
PRENECの進捗状況 4
プロジェクトセメスター 5
活動報告 6

ベルナルド・オヒギンス勲章

大山前学長ベルナルド・オヒギンス勲章を叙勲

　これまでの40年にわたるチリでの本学の取り組みに対して同国政府から高い評価を受け、12月5日に駐日チリ共和国大使公邸にて大山喬史前学長がBernardo O'Higgins（ベルナルド・オヒギンス）勲章を叙勲されました。

　この勲章はチリの政治、経済、医療、教育、文化関係への貢献のあった外国人に対し、チリ大統領から授与される最高位のものです。

　式典には、田中雄二郎氏（本学理事）、フランシスコ・ロペス氏（PRENECプロジェクトのチリ側の責任者・本学客員教授）、河野辰幸氏（本学前副理事・前LACRC拠点長）、椿昌裕氏（元LACRC特任教授）、河内洋氏（元LACRC講師）、岡田卓也氏（本学講師）、小林真季氏（元LACRC研究員・特任助教）、松宮由利子氏（本学・チリ大学ジョイント・ディグリー・プログラム大学院生）、延原都香氏（本学事務長）、田中雅彦氏（本学次長）、ソニア・レオン・カマラ氏（本学係員）参列のもと、ディアス臨時代理大使より伝達されました。

ベルナルド・オヒギンス勲章

ディアス臨時代理大使と大山前学長

式典出席者と記念撮影

ジョイント・ディグリー・プログラム

11月にチリ大学及びCLCの医師3名が来学し、今後のジョイント・ディグリー・プログラム（以下JDP）の運営について情報交換を行いました。また今年度も本学とチリ大学の合同教職員FD研修を実施し、最新の医療制度、最先端医療・研究を互いに理解しあう貴重な機会となりました。本号では訪問時の様子をお伝えいたします。

11月のチリ大学教員による本学訪問及び Joint Workshop 2017@TMDU

11月28日・29日にチリ大学のオライアン教授、ウリベ教授、トレス准教授が来日し、医学部附属病院の見学、本学学長訪問、JDP会議、JDP学生への指導、また教職員FD研修「Joint Workshop 2017@TMDU」を行いました。本研修は昨年同様両大学の教員の能力向上と意識を共有するために実施し、チリに関係する教員や学生を含め、2日間で約65名の参加者が出席しました。

「Joint Workshop 2017@TMDU」の様子

学生指導の様子

左よりトレス准教授、北川医学部長、吉澤学長、オライアン教授、ウリベ教授、小嶋教授

PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト（PRENEC）の最新情報をご報告いたします。現在、バルパライソにおけるPRENECが、病院の予算確保の問題で低迷しているものの、プンタ・アレナス、サンティアゴ、バルディビア、オソルノ、コキンボの5都市、及び国外ではパラグアイでのパイロットプログラムが順調に進行しています。

ロペス医師、本学にてPRENECの進捗報告

12月5日のベルナルド・オヒギンス勲章の叙勲式典の為にチリから駆けつけたロペス医師は、翌日、本学にて行われたPRENEC会議に参加し、本学の田中雄二郎理事、植竹宏之教授、安野正道准教授へPRENECの進捗状況を報告しました。

チリ国内外でのPRENECの拡がりと今後の展開について協議されました。

PRENEC会議の様子

カラマ市における講習会

チュキカマタ銅山

チリ北部に位置するカラマ市は標高2700mの街で、世界最大の露天掘りの銅山であるチュキカマタ銅山のベッドタウンです。

この都市で、12月21・22日の2日にわたり、チリ北部のカラマ市のカラマ病院にて、CLCのロペス医師、ペニャローサ医師、ポンセ看護師がPRENECに関する発表を行いました。

この会をとおして、今後カラマでもPRENECが展開されることが期待されます。

プロジェクトセメスター

本学医学科4年次の学生を対象とした学生海外基礎医学実習（プロジェクトセメスター）で、6月よりチリ大学に派遣されていた2名の学生は、11月をもってチリにおける課程を終えました。帰国前の最終発表会では、チリの担当教官及び研究室スタッフを前に堂々と研究成果を発表し、各担当教官より高い評価を受けました。南米という異文化で得た様々な体験を通して、将来、海外でも活躍できる医師へと成長することが期待されます。

最終発表会を終えて

小島原知大　チリ大学　腎臓病学研究室所属

11月までチリ大学医学部に派遣されていました、医学科4年の小島原知大です。チリに来たことがつい昨日のことのように思い出されます。

研究実習では「南米は資金力では世界に勝てないから、アイデアで勝負するんだ」という言葉が印象に残っていて、私もそのアイデアを生む過程に何回も参加し、手技だけでなくサイエンスの考え方の面も成長させることが出来ました。また、サイエンスの共通言語である英語で研究実習を行えたことは、この先のキャリアを考える上で大変参考になりました。

このような貴重な機会をくださった北川医学部長をはじめとした医科歯科の先生方、現地での生活を全面的にサポートしていただいたLACRCスタッフの皆さん、研究の面で多くの刺激を与えてくださったチリ大学の先生方への感謝を常に忘れず、歴代派遣の先輩方のように後輩たちを支援する立場に回り、医科歯科とチリの関係がより良いものとなるように尽力したいと思っています。

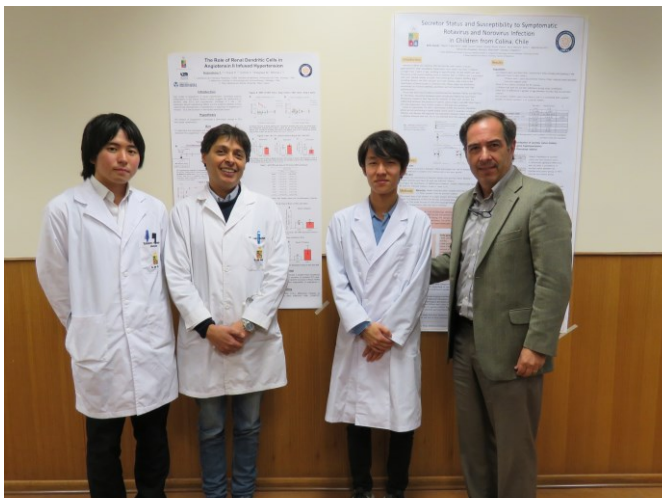
最終発表会の様子

鈴木圭人　チリ大学　感染症学研究室所属

チリの生活があっという間に過ぎてしまいました。この半年間の生活は本当に充実していました。

研究面では、ELISやqPCRなど実際のラボの作業だけでなく、インフォームドコンセントの承認を頂くために倫理審査委員会に足を運び、自分が書いたプロトコルを提出するという経験までさせていただきました。未熟なスペイン語を使いながら委員長、副委員長そして秘書の方の前で研究について説明させていただいたことは非常に良い経験になりました。また、サンティアゴの外にあるコリーナという町では、実際に自分の研究で使わせて頂く唾液サンプルの収集キットを各ご家庭に配布するというお仕事にも参加させて頂きました。最後まで温かく見守ってくださったオライアン先生をはじめ、研究室のみなさまのサポートのおかげで、「医学研究とはどのようなものか」ということを多角的な視点で学ぶことができました。

TMDU、チリ大学の皆様のサポートのおかげで、最後まで充実した時間を過ごすことができました。この半年間の生活は一生の財産になる、と今から確信しています。本当にありがとうございました。



お世話になったチリ担当教官と記念撮影

LACRC活動報告

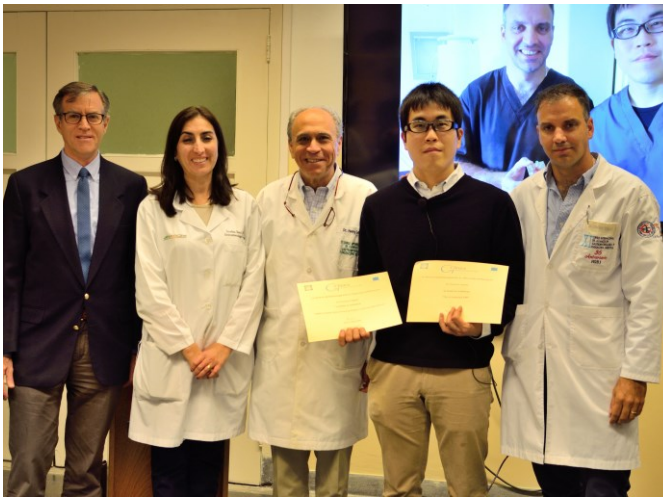
ウルグアイ出張

10月21日から27日までClínica de Gastroenterologíaの要請を受けて、LACRCの小田柿助教が、内視鏡治療の指導及び講演目的にてウルグアイの首都、モンテビデオを訪れました。滞在期間中、同院内の医師やレジデントを対象に内視鏡診断・治療の指導にあたり、講演会では、「本学が関与したチリ及びラテンアメリカでの大腸がん検診プロジェクト」及び「大腸EMRの際の基本事項」に関する発表を行いました。

今後もこのような機会を通して中南米の医療の向上に貢献してまいります。

発表の様子

内視鏡技術指導の様子



病院関係者との記念撮影

病院レジデントへレクチャーを行っている様子

安野准教授によるチリ視察

本ニュースレターの巻頭言でお伝えしましたように、本学の安野准教授が、11月14日から約3週間、外科分野での技術協力の可能性を調査する目的でチリを訪問しました。滞在中は、CLC、国立サン・ボルハ病院、チリ大学附属病院、国立マイプ病院における外科的なアクティビティに加えて、チリの大腸肛門外科医等を対象とした直腸がんシンポジウムでの演者及びパネリストを務め、聴衆からは多くの関心が寄せられました。

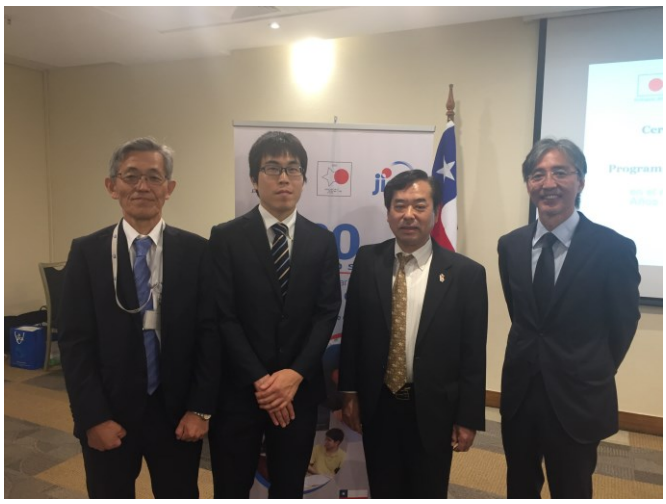
その他、JDPに関連した用務として、チリ大学訪問の際にオライアン教授と今後のJDPの課題について協議をしました。また、フィニス・テラエ大学で医学部生対象に行った特別講演会では、日本の外科診療、医学教育制度及びJDPに関して紹介しました。

また、12月1日には、日本チリ修好120周年の記念行事として開催されたJICAボランティア派遣20周年記念式典にLACRCスタッフとともに出席しました。

今回の視察により外科分野の技術協力の展開が期待されます。

シンポジウムでの発表の様子

オライアン教授との会談



JICAボランティア派遣20周年記念式典での記念撮影
左より桜井JICAチリ支所長、小田柿助教、平石在チリ日本大使、安野准教授

特別講演会が行われたフィニス・テラエ大学

LACRCへの来訪者

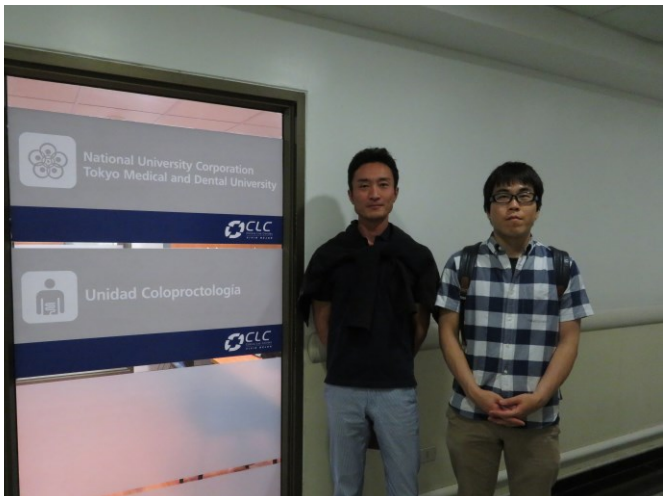
五十川医師(右から2番目)とLACRCスタッフ

学会等で来智した方々をLACRCにお迎えし、我々の活動等を紹介することがあります。

10月4日～7日にサンティアゴで開催された国際小児歯科学会へ参加するために来智された国立成育医療研究センター病院小児歯科の五十川伸崇医師が、10月6日にLACRCを訪れました。LACRCオフィスを紹介し、我々の活動の説明をした後、CLC歯科部門の見学もしていただきました。

また、サンフランシスコに留学している本学消化器内科の清水寛路医師が12月に来智した際に、同期の小田柿助教が、LACRCオフィス及びサン・ボルハ病院を案内しました。サン・ボルハ病院では小田柿助教の内視鏡指導の様子なども見学していただきました。

サンティアゴに訪問する予定があり、我々の活動に興味のある方は是非ご連絡ください。



清水医師(左)とLACRCオフィスの前で

サン・ボルハ病院日智消化器病研究所前にて

編集後記

今年も残すところ僅かとなりました。振り返ると、JDP及びPRENECの拡大、チリプロジェクトセメスターの再開、また秋篠宮殿下・妃殿下のチリご訪問、大山前学長のベルナルド・オヒギンス勲章の叙勲、と例年に比べて印象深く、充実した年となりました。私個人としては、LACRCでの業務を通して多くの素晴らしい方々に出会う機会をいただくことが出来ました。

また、CLCでは、本学とチリ間のプロジェクトにご支援をいただいてきたマニャリッチ元保健大臣が今年11月にCLCのCEOに就任し、ロペス医師が2017年の院内最優秀医師賞を受賞しました。これらが追い風となって来年はさらなるプロジェクトの飛躍が期待されます。

皆様が良い年を迎えられますようお祈り申し上げます。(早川美貴)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No.28, December 2017

[発行日] 2017年12月31日
[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp

Newsletter

No. 29 March 31 2018

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

特別寄稿
「日本での研修を終えて」

チリ人血液内科医のマルセラ･エスピノサと申します。

LACRCの小田柿智之先生のご紹介で、本年1月4日から3月末まで、東京医科歯科大学血液内科で研修の機会を得ることができました。お世話になりました先生方の研究活動や、入院及び外来での実際の診療を通して、様々な経験をすることができました。

その中で、日本とチリとでは、疫学的に頻度の高い血液内科疾患が大きく異なっていることに気付きました。例として、日本ではチリに比べて、慢性リンパ性白血病とヒト免疫不全ウイルスに関連したリンパ腫の発症率 が低いことなどが挙げられます。一方、チリでは殆ど経験したことがないEpstein-Barr ウイルス、ヒトT細胞白血病ウイルスとそれらに関連した疾患を日本で経験することができました。

こういった経験ができたのは、非常に親身に丁寧に対応してくださった、優秀な血液内科の先生方のお力によるものです。

加えて、年間100件ほどの骨髄移植で実績のある駒込病院にも研修に行かせていただきました。

高度な先進医療を行う2施設で多くのことを経験できたことに、心より感謝を申し上げるとともに、多くの外国人医師に、私のような素晴らしい経験をしていただきたいと思う次第です。

血液内科医　マルセラ･エスピノサ

LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile

本学血液内科の先生方と記念撮影
（本人:1列目、左より3番目）

駒込病院の先生方と記念撮影
（本人:1列目、左より3番目）

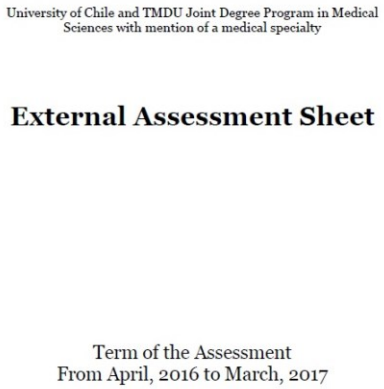
Contents

ご挨拶 1
JDプログラム 2
PRENECの進捗状況 3
活動報告 4

ジョイント・ディグリー・プログラム

本年3月に本学及びチリ大学以外の委員で構成する第三者評価委員会を初めて実施しました。また、同月にプログラムの総括を行うため医学部長会議を行いました。本号では会議の概要をお伝えいたします。

第三者評価委員会及びJDP医学部長会議の開催


University of Chile and TMDU Joint Degree Program in Medical Sciences with mention of a medical specialty

External Assessment Sheet

Term of the Assessment
From April, 2016 to March, 2017

本年3月1日から20日にかけて、外部の医療・教育関係者3名で構成する第三者評価委員会を開催しました。2016年度の本プログラムの活動に関する自己点検・評価報告書に基づいて実施され、第三者評価委員会で、外部評価報告書を作成しました。総合評価では高い評価を得ることとなりました。

また、3月29日に医学部長会議を開催し、チリ大学よりククルジャン医学部長、オライアン教授、本学より北川医学部長、小嶋教授、植竹教授が出席しました。会議では2017年におけるJDPの総括、第三者評価委員会の結果、新たな分野でのJDPの拡大等について協議しました。

JDP学生チリへ到着

JDPの二期生として昨年10月に入学した松宮由利子医師が、3月29日にチリに到着しました。第1セメスターではチリ大学医学部で基礎科目を受講し、クリニカ・ラス・コンデス(以下CLC) 内の研究部門では臨床研究演習を受講します。

また第2セメスターでは、本人の学習状況に合わせて講義科目を選択する予定です。

LACRCは学生が充実して過ごしていけるようにサポートしていきます。

左よりアウマダ氏、松宮医師、オライアン教授

PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト（PRENEC）の最新情報をご報告いたします。現在、プンタ・アレナス、バルパライソ、サンティアゴ、バルディビア、オソルノ、コキンボの6都市でプログラムが進行しています。これに加え、2月にはコンセプシオンへ疫学的便潜血反応検査キットが送付され、患者登録の準備が行われています。国外では、パラグアイにて6月より開始したパイロットプロジェクトが終了し、今後は正式にPRENECに参加する方向で準備が進められています。

PRENEC会議

LACRCの小田柿助教の一時帰国に合わせて、2月14日にPRENECに関する会議が行われました。本学からは、田中雄二郎理事、植竹宏之教授、安野正道准教授、岡田卓也講師、伊藤崇助教、吉田丘部長、片山智弘課長、野村直史氏、ソニア・レオン・カマラ氏が参加しました。小田柿助教がPRENECの進捗状況に関しての報告を行い、今後の展開について協議しました。また、翌15日には、吉澤靖之学長へ2017年度のチリでの活動を報告し、学長より激励のお言葉をいただきました。

左より小田柿助教、吉澤学長

左より安野准教授、小田柿助教、田中理事

LACRC活動報告

消化器講習会への参加

3月22日・23日、サンティアゴ市内の有数の私立病院であるクリニカ・アレマナにてXI Curso Avances en Gastroenterología Diagnóstico y Manejo en Oncología Digestiva（第6回消化器診断・消化器腫瘍の取り扱いアドバンスコース）が開催され、小田柿助教が演者として参加しました。この講習会では、チリ国内の消化器科医を対象に行われ、小田柿助教は「早期食道がんの診断」に関する発表をしました。症例検討会も行われ、活発な議論が交わされました。

左よりルエダ医師、小田柿助教、サエンス医師

クリニカ・アレマナ外観

編集後記

本学とのプロジェクトに大きく関わっているCLCのロペス医師が、本年3月より現職のCLC大腸肛門外科部長に加えて、CLC内がんセンターのセンター長を兼務することとなりました。また、PRENECが公立病院を対象としているのに対し、これと並行してチリ国内の私立病院を対象とした大腸がん早期診断プロジェクトが、CLC独自で始まりつつあります。これにより公立・私立病院の枠にとらわれず、より多くのチリの大腸がんの早期発見に繋がることになります。今後もLACRCオフィスの近況をご報告してまいりますので、引き続き、ご愛読の程宜しくお願いいたします。（早川美貴）

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No.29, March 2018

［発行日］2018年3月31日
［制作］Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp

Newsletter

No. 30 June 30 2018

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

笑顔と挨拶で始まる1日

Newsletter30号の巻頭言を担当させていただきます、東京医科歯科大学・チリ大学国際連携医学系専攻（ジョイント・ディグリー・プログラム：JDP）1年生の松宮由利子です。

今年4月にサンチャゴへ到着して早3ヶ月が経ちました。

日本は梅雨明けが発表され益々暑くなる中、西日本豪雨・大阪府北部地震・千葉県沖地震と災害に見舞われ、甚大な被害が出ております事、心よりお見舞い申し上げます。

サンチャゴは寒気いよいよ厳しく、窓から見えるアンデスの山々はすっかり雪景色です。朝晩は非常に冷え込み、暖房とCalientacamasというベッドに敷くホットカーペットが必需品となっています。

スペイン語もままならない生活の中で感じる事は、チリ人は非常に紳士的で友好的だという事です。行き交う人々は、見知らぬ人同士でも“iHola!”と笑顔で挨拶を交わし、「お先にどうぞ」とドアを後ろから来る人の為に開けてくれます。地下鉄内では座席を座る人に暗黙の優先順位があるようで、老人・子供は勿論、女性にも席を譲ります（ゆえに、男性はほとんど座席には座れないという状態です）。私自身、日本の電車内で席を譲ろうと席を立ったところ、中年男性が席を必要としている方に声をかける前に座ってしまい、やり場のない気持ちになった経験があります。世界的に見て礼儀正しいと言われる日本人ですが、他者との関わりを極力避け、電車内ではスマホに夢中になって譲る気のない日本人のモラルの低さには恥ずかしいとしか言いようがありません。

2020年の東京オリンピックに向けて益々グローバル化の進む日本ではありますが、世界基準におけるモラルについて見直す必要があると思います。

笑顔で挨拶を交わしたり、他者へ手助けをした事で「ありがとう」と言ってもらう事で、非常に満たされた気持ちでその日が迎えられるのではないでしょうか。

松宮由利子　博士課程医歯学総合研究科 1年

LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile

CLC CLINICA LAS CONDES

Contents

ご挨拶 1
JDプログラム 2
PRENECの進捗状況 3
プロジェクトセメスター 4
活動報告 5

ジョイント・ディグリー・プログラム

本年３月末にチリに到着したJDP二期生である松宮由利子医師は、現在、クリニカ・ラス・コンデス(以下CLC)での臨床研究演習及び、チリ大学における基礎科目を中心に取り組んでいます。これ以外にも、JDP学生として様々な活動に参加しておりますので、本号ではその様子をお伝えいたします。

JDP関係者懇親会

５月１５日、チリ大学主催のJDP関係者懇親会がサンティアゴのシェラトンホテルにて行われました。オライアン教授、ウリベ教授、カスティジョン教授、ポニアチック教授、トレス准教授、チリ大学医学部国際交流課副課長のアウマダ氏、同大学院局評価室のアエド氏に加えて、JDP学生のサモラーノ医師、サナブリア医師、松宮医師が参加しました。

JDP学生の進捗等の報告や、JDPプログラムに関する意見交換が行われました。

懇親会の様子

チリ大学総合キャンパスにてプログラムの紹介

発表の様子

５月２２日、チリ大学総合キャンパスで、大学院留学生を対象としたウェルカムセレモニーが行われました。

チリ大学は、主に中南米諸国から多くの学生を受け入れており、セレモニーには約１２０名の留学生が参加しました。同大学院には様々なプログラムが存在し、各プログラムの代表者が概要説明を行いました。

松宮医師はJDPの紹介を行うとともに、「世界トップクラスの研究施設であるチリ大学で学べる事を誇りに思うとともに、両国で学べる利点を生かして、国際的医療人として活躍できる人材となるべく勉学に励みたい」と抱負を語りました。

PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト（PRENEC）の最新情報をご報告いたします。現在、プンタ・アレナス、サンティアゴ、バルパライソ、バルディビア、オソルノ、コキンボの6都市でプログラムが行われています。6都市に加えて、新たにコンセプシオンで、疫学的便潜血反応検査キットを用いた検査が開始されました。また、国外ではパラグアイで、PRENECの開始に向けての準備が順調に進行しています。

今号ではその様子をお伝えします。

パラグアイにおけるシンポジウム

左よりロペス医師、吉田所長、カンポス医師、モリニゴ大臣、オルティス副所長

４月１８日から２０日の期間に、パラグアイのアスンシオンにあるパラグアイ国立がん研究所（INCAN）で、大腸腫瘍疾患シンポジウムが開催され、PRENEC責任者であるロペス医師、PRENECコーディ―ネーターのポンセ看護師とともにLACRCの小田柿助教が演者として招聘されました。

会期中に開かれたセレモニーには、パラグアイ厚生省のモリニゴ大臣、当時のJICAパラグアイ事務所所長であった吉田所長、同研究所のオルティス副所長、パラグアイにおけるPRENEC責任者となるカンポ医師が出席しました。

本シンポジウムでは、小田柿助教が『PRENECにおける大腸内視鏡トレーニング』に関する発表を行いました。

また、並行して巨大結腸モデルを使用した一般市民への啓発活動も行われました。

こういった活動を通して、パラグアイ国内でのPRENECの拡大が期待されます。

関係者との記念撮影

巨大結腸モデル内にて記念撮影

プロジェクトセメスター

本学は、2010年から、学生海外基礎医学実習（プロジェクトセメスター）の目的で、医学科4年生を約4～6カ月に渡ってチリの研究施設に派遣してきました。

今年度も2名の学生がチリ大学の研究室に所属し、6月初旬より研究に取り組んでいます。日本とは異なる環境下での生活や研究は、困難も伴いますが、異文化を楽しみながら充実した時間が過ごせることを願って、LACRCはサポートを行ってまいります。

プロジェクトセメスター学生の抱負

サンクリストバルの丘で食べた
Mote con Huesillo

川上七海　チリ大学　感染症学研究室所属

医学科4年の川上七海です。5月末からチリでの生活が始まって3週間が経ち、最初は全く慣れなかったハグをしながらのこちらの挨拶にも徐々になじんできました。買い物の際にはまだ分からない単語が多く翻訳アプリと見比べながらスーパーを歩き回る毎日です。

私はチリ大学医学部小児感染症学のMiguel O'Ryan先生の研究室でノロウイルスの検出とジェノタイピングについて学んでいます。研究テーマはチリのある地域におけるノロウイルスのジェノタイピングになる予定で現在は様々な論文を読んでノロウイルスの基礎知識や各種検出、ジェノタイピング方法について整理している段階です。O'Ryan先生の研究室の方々はもちろん周りの研究室のメンバーや秘書課の方々も非常に明るく親切で、楽しくチリでの研究室生活を送ることができています。

本学、チリ大学の先生方、学生派遣係やLACRCの方々など、非常に多くの方々のサポートのもと実現しているこの留学を実り多いものにできるよう励んでいきます。

中央市場の様子です。歩いていると日本語でウニ！と言われます。

隈　宙音　チリ大学　腎臓病学研究室所属

こんにちは。今年度チリ大学派遣学生の隈宙音と申します。時の流れは早いもので、ようやくこちらでの生活に慣れたかと思えば すでに1ヶ月が経ってしまいました。

私はチリ大学医学部腎臓病学のLuis Michea先生のもとで、腎不全に関与しているとされるホルモンの発現調節機構を調べています。研究に関する一切は英語（とスペイン語少々）で説明されるため、それらを素早く理解するのは決して容易ではありませんが、研究室のメンバーがいつも親切に助けてくださるおかげで楽しく過ごすことができています。「この実験は何の目的で行われ、どういう原理で成り立ち、どんな結果が予想されるのか」をきちんと理解するのを目標に日々奮闘しております。

一方でスペイン語の勉強も欠かさずに続けています。まだ始めてから間もないものの、帰る頃には立派なEspañol Chilenoを話せることを夢見て教科書を握りしめているところです。

LACRC、チリ大学の方々をはじめとして、医科歯科の先生・スタッフや歴代の先輩方には多大なサポートを頂いております。皆さまへの感謝を忘れずにこれからも全力で取り組んでまいります。

LACRC活動報告

チリ南部における胃がん検診プロジェクト

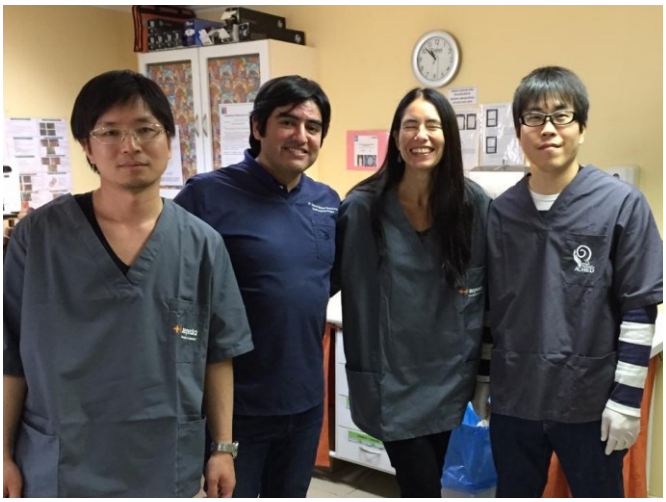
昨年に続き、チリ内視鏡学会主催の胃がん検診プロジェクトが行われました。今回は、4月16日から約8週間にわたりチリ南部の3都市（コンセプシオン、ビクトリア、ヌエバ・インペリアル）で行われ、小田柿助教は5月21日から24日の期間に、内視鏡技術指導者として、ビクトリアの公立病院に招聘されました。このプロジェクトは、臨床研究的な要素の他に、チリ地方都市での病院の設備や内視鏡医の不足などの問題から内視鏡検査が数年待ちの状況を改善する目的もあり、40歳以上の最低でも1年以上の待機患者を対象に実施されました。

小田柿助教に加え、日本から九州大学の森山智彦医師、神戸大学の石田司医師、大阪国際がんセンターの金坂卓医師が招聘されました。 森山医師は中南米諸国の医師らと定期的にテレビカンファレンスをされるなど中南米事情に精通され、また、石田医師はフィリンピンに、金坂医師はスウェーデンに、現地医師への内視鏡指導の目的で赴任された経験のある方々です。

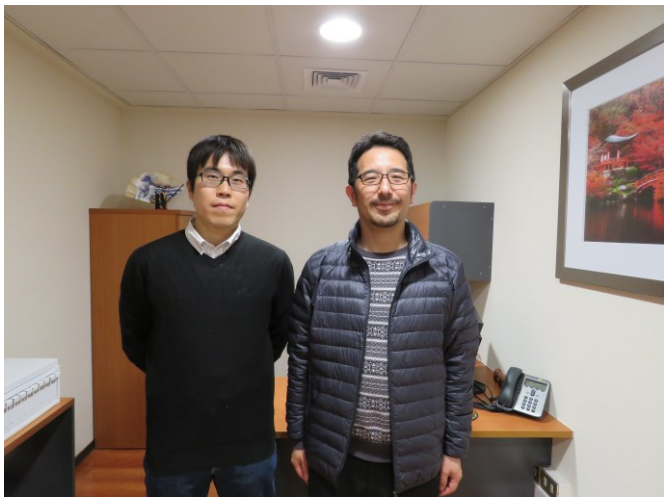
こういった先生方と意見交換をしたり、実際に指導する現場を目にできたことは、チリでの活動を行っていく上で、非常に有意義な機会となりました。 今後も様々な活動を通して、チリ及び中南米諸国の医療に貢献できればと思っています。

病院スタッフとの記念撮影

石田医師(左)と病院スタッフ



左より金坂医師、モリーナ医師、ビアル医師、小田柿助教



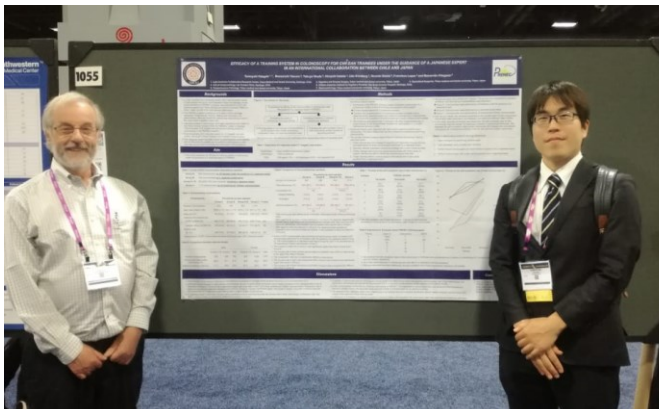
森山医師がLACRCを訪れた際の記念撮影

米国消化器病週間における発表

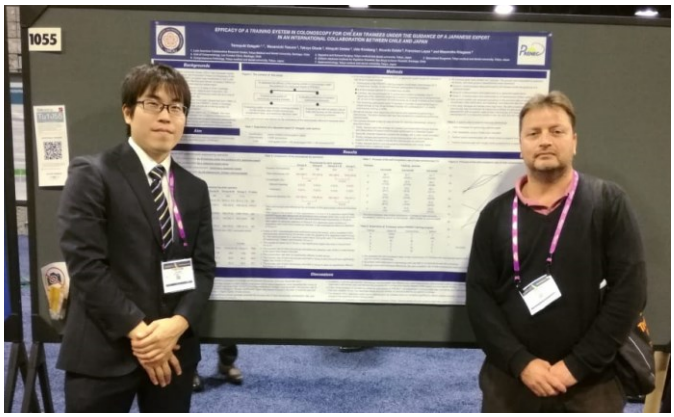
６月２日から５日にかけてアメリカ、ワシントンD.C.で開催された米国消化器病週間（Digestive Disease Week ２０１８）にて、小田柿助教がポスター発表を行いました。

“EFFICACY OF A TRAINING SYSTEM IN COLONOSCOPY FOR CHILEAN TRAINEES UNDER THE GUIDANCE OF A JAPANESE EXPERT IN AN INTERNATIONAL COLLABORATION BETWEEN CHILE AND JAPAN”という演目でPRENECにおける研修医師への大腸内視鏡トレーニング方法及び結果についてまとめました。

発表の際に、国際医療協力に興味のある先生方と意見交換をした他、プンタ・アレナスおよびコキンボのPRENEC拠点長であるカレロピッチ先生、ブレスキー先生がPRENEC関係者として訪れてくれました。今後もLACRCの活動を学会や論文等で発表していきたいと考えています。



会場にポスター発表を聞きに訪れたカレロビッチ医師(左)と記念撮影



会場にポスター発表を聞きに訪れたブレスキー医師(右)と記念撮影

DDW2018のロゴ

ワシントン・モニュメント

編集後記

当地では、移民の増加が著しく、昨年は78万人、遂に今年は100万人となり社会問題となっております。ここ数年は政治的な背景もあり、ハイチ人、ベネズエラ人が移民の大半となっていますが、この影響を受け、外国人登録の手続きをする国際警察署には、連日、外国人の長蛇の列ができています。チリに到着して間もない学生さんも、この列に並ぶこととなりましたが、今月、無事にチリでの身分証明書が交付され安堵しているところです。

今後も本Newsletterを通してLACRCの活動を報告してまいります。（早川美貴）

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No.30, June 2018

［発行日］2018年6月30日
［制作］Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp